
影追う者

Joker

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

影追う者

【Nコード】

N6899L

【作者名】

Joker

【あらすじ】

アルベルト博士はドイツの生んだ天才科学者だった。彼により提唱された『人類進化計画』は秘密裏に進められていた。究極の理性、思考力、筋力。すべてにおいて現生人類よりも優れた人類を作り出すプロジェクトだ。アルベルトは『ゲシュペンスト』という裏組織を使い、人体実験を行うためにドイツで次々と誘拐や暗殺を行った。その裏には日本を売り飛ばした政治家である鳩川紀夫がいる。いくつかの情報を元に、そう断定したドイツは日本政府に鳩川紀夫の拘束を依頼した。日本政府は過去のある事件を解決したジョーカーと

いつ青年をドイツに送り込んだ。

第一話：死神（前書き）

皆様こんにちは、Jokerです。

この小説は前作『種時く者』の続編、第二部となっております。
第一部を読まなくてもストーリーは分かるようにしてあります。
第一部を読むのが面倒くさい！という方はこちらからどうぞ。
月並みな設定ですので、読まずとも大丈夫なはずです多分。

では、第二部開幕です。

第一話：死神

ドイツには日本とは違った風景がある。

西洋独特の橋梁や建物が古代の趣を残したまま時間を越えて存在している。

灰色のレンガで作られた水道はローマ帝国時代の名残として機能している。

アジアでは味わえない雰囲気だ。

ドレスデンはドイツ東部、東欧諸国との国境付近に位置する都市として知られている。

ザクセン選帝侯のお膝元としての顔を持っており、そのため中世や近代に造られた宮殿が多く保存されている。これを目当てにくる観光客も多い。

エルベ川を通してマイセンなどの交通もあり、観光都市であると同時に工業都市として今は栄えている。

ジョーカーはまず日本政府から案内された暗殺ギルド（ここでは同業者組合のことを指す）に行くことにした。彼は北京民主共和国の北西部にあるウィーゲル地方出身の青年である。シヨットガンなど銃器を得物としてアサシン（暗殺者）として世界各国から依頼を請負い、生計を立てている。彫りの深い整った顔立ちと褐色の肌が目立つ。

しばらく歩いていると、爽やかな風が肩までかかる赤毛と白いシヤツの上に着ている紺色のブルゾンを揺らす。

ギルドに入ると、若い娘が出迎えた。

年は二十歳ほど。ブロンズの腰まで届く長い髪を三つあみにしている。大きな茶色の瞳、頬にはそばかすがある。美人ではないが、気立てのよさそうな子だ。緑色のチュニツクに黒のタイトスカートもスリムな体型に似合っている。

「よっこそ」

「ああ」

ギルドの内部は企業のオフィスのように整然としていた。内装は清潔感を出すためか白で統一されており、観葉植物が部屋の隅にくっつか置かれている。部屋の中央部には事務員たちの机があり、彼らはそこで忙しなくパソコンのキーを叩いている。

ジョーカーと娘は入り口の近くにあつた机に向かい合うようにして座つた。

「鳩川紀夫の件ですね？」

「ああ」

「少し厄介なことになっています。実は『ゲシュペンスト』という組織が動き出しています……この組織のことは知っていますか？」

『ゲシュペンスト』とはドイツ語で『亡霊』あるいは『幽霊』という意味だ。

「いや、全然」

「でしょうね」

娘はため息をつくくと、話し始めた。

「ドイツの暗殺組織、犯罪組織とでも言いましょうか。まあ、かなり危険な組織です。それが活動を始めたんです。鳩川がその背後にいる、と言われていました」

「つてことは、今までは活動していなかったのか？」

「ええ。『クイーン』事件発生から全く動きがなかったのですが、事件解決後に……」

「それなら普通に取り締めればいいだけの話じゃないか」

「取り締まれる、なら。『ゲシュペンスト』に腕利きの殺し屋が入つたらいいんです。ここでは『ドレスデンの死神』と呼ばれている『ドレスデンの暗殺ギルド』は国家と連携していることもある。というのも、国家お抱えのギルドだからだ。

ジョーカーは数秒、視線を机の上に落として考え込んだ。

「へえ……で、その死神は確かに存在するのか？ 目撃情報は？」

「いいえ、ありません」

「おいおい、情報が曖昧だな」
「あたりと椅子から立ち上がる。」

「とりあえず、調べてくる」
「仕事は請けるんですね？」

「ああ。ただし、俺は俺なりのやり方でやるからな。文句は言わせない」

「わかりました。『ゲシユペンスト』の調査及び鳩川紀夫の拘束を依頼します」

ジョーカーはそれを聞くと、勢い良く外へと出て行った。

鳩川紀夫はドイツ地下街で『クイーン』事件解決前から設置しておいた組織を拡大していた。

鳩川紀夫は日本の元首相だった男である。しかし、巨額の金に目がくらみ、北京民主共和国の傀儡となっていた事実があった。

結果、鳩川は躊躇なく日本を蹂躪させ、日本の主権を北京民主共和国に明け渡した。日本では日本史上最も愚昧な人物として知られている六十五歳の男である。

「ボクちゃんは愛の皇帝鳩川紀夫様だ。カエサルやトラヤヌス帝以上の大帝になる男だ」

訳の分からない言葉を撒き散らしながら、街の中を闊歩する。

ドレスデンでは狂った男として有名である。しかし、一方では謎の大富豪として知られている。その財産の出所が母親ということから『マザコン財閥』とあだ名されてもいる。

鳩川は昼間から酒を飲み、べろべろに酔っ払ってアジトに戻った。

「おい、小川一郎ッ！ ボクの愛の本を持って来いッ！」
叫ぶように鳩川は小川に言いつける。

小川一郎とは元日本国の政治家で、かつて日本を北京民主共和国と朝鮮連王国に売り渡した稀代の悪党である。ヤクザ顔負けのいかつい顔と、でっぷりした体型から威圧感を放つ男だ。

「……」

軍服姿の小川は生気のない瞳をして、静かに鳩川に本を手渡した。

「おお、これはボクの書いた『友愛真理教経典』だ。紫電は死んだみたいだし、ボクが世界の愛の使者になるのも遠くないぞ！」

馬鹿笑いをしていると、迷彩色の軍服姿の中年兵士が一人歩み寄ってきた。

「鳩川様、今日の活動はどうしましょうか？」

「ウム。ボクの愛を否定する連中を片っ端から友愛すのだ！ それから、強化兵士の性能テストもしなくちゃいけないね」

「はっ。強化兵士を使い、ギルドを襲撃いたします」

「標的はギルドにするのお？」

鳩川は依然虚ろな目をしている。

「はい。最近ギルドの犬どもが我が『ゲシユペンスト』を嗅ぎ回っているらしいですから」

「まあいいや。ボクの愛をしっかりと知らしめるんだぞ。そうしたら、子ども手当てをやるっ」

上機嫌で鳩川は言うつと、兵士を下がらせた。

夜になった。

闇に紛れて、十数個の人影が街を駆け抜ける。

それらはギルドの前に集結すると、一斉に銃口を入り口のドアに向けた。

第一話：死神（後書き）

こんばんは、Jokerです。

第二部開幕しました。

これもですが、第一部と同様以前に投稿していたものを書き改めたものです。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

第二話：金色の瞳

翌日、朝になるとギルド襲撃事件はドレスデン中に知れ渡っていた。

死傷者十名。ドレスデンでは大きな事件として各メディアに報じられたのである。

それを聞きつけたジョーカーはすぐにギルドへ向かった。

「悪運強いな、アンタ」

娘の顔を見るなり、ジョーカーは呆れ顔で娘に言った。

「笑い事じゃないですっ！ 大変だったんですよ」

「大変なのはそこらへんの銃撃跡みたら分かる」

歩き回って、一つ一つの銃撃箇所を調べて回る。

「ふーん……結構な戦闘経験者が来たみたいだねえ」

ぼそりと呟く。

「おいアンタ」

「何ですか？」

「この手紙、読んだのか？」

ギルドの受付にある箱の中にあつた黒い手紙を取り出した。

『我らは第三帝国の御使い。世界の運命を変えるため、ここに立ち上がるん』

一行だけの文章がある。

第三帝国という言葉はかつての独裁者ヒトラーが使った言葉だ。

ジョーカーは異質な黒い手紙としばらくにらめっこをしている。

「まさか、鳩川紀夫が絡んでいる……なんてことはあるか。余計なことしかないヤツだもんな」

あははと笑って、ジョーカーは手紙を懐にしまった。

鳩川はドレスデン郊外にある地下研究所にいた。

「ふはははッ！ ボクの愛が今日も輝いているぞ！」

鳩川はグレーの上等なスーツを着て研究所内を闊歩している。

澄んだ青色の液体で満たされた巨大なフラスコがいくつも並び、その中には人間が入っている。彼らにはいくつものコードが付けられていた。

「強化兵士をどんどん作るのだ！ ボクの愛を込めて友愛の戦士たちを作るのだ！ これは聖戦ならぬ愛戦なのだ！」

「わめき散らしながら歩く鳩川に一人の中年研究者が近づいてきた。『教皇様、例の実験が成功しました。これを大量生産することが出来れば大変な戦力になりますぞ。シミュレートしましたが、強化兵士の数倍の戦闘力を引き出すことが可能です』」

研究者はうやうやしく鳩川に説明する。鳩川は友愛教団信者からは『教皇』と呼ばれることが多い。

「うむうむ。ボクちゃんの愛の賜物だな。それでアルベルト博士、アルティマティウムの研究は進んでいるのか？」

「はい。人体とのリンク。それによる筋力及び思考力の限界突破を可能にしました。しかし、リンクによる人体構造の破壊が弊害として表れます。この解決にはまだ何十年もかかるかもしれません」

アルベルト博士は彫りの深い顔を鳩川に向けた。身長は二メートル弱と高いため、自然鳩川を見下ろす形となる。博士は珍しい金色の瞳を動かして、白衣のポケットから取り出した書類データを読み上げる。「被験者『河野一郎』死亡。リンク失敗。被験者『リヒャルト』精神崩壊。リンク第三段階にて異常発生。被験者『アーノルド』死亡。リンク第五段階にて異常発生」

アルベルト博士はため息をつく、書類を右手に抱えた。

「まだリンクによる死亡例が多いのが現状です。まずはこれを改善することから始めなければなりません」

博士はがっしりとした肩を落とした。

「まあ気長にやるのだ。強化兵士だけでも紫電亡き今、ボクに敵う者はいない」

鳩川はへらへらと笑っている。

「教皇、その『紫電』というのは？」

「かつて最強の暗殺者とされた男だ。日本人で『羅生門』という暗殺部隊の生き残りでな。事あるごとにボクの邪魔をするいけ好かないやつなのだ」

鳩川は手足をじたばたさせて怒り出した。

「ほう……興味深いですね。確か、『種蒔く者』と呼ばれる人間でしたね。誰にも扱えない『戒正』という刀を操る無双の忍ではなかったですか？」

「うむ」

博士は金色の瞳をぎらぎらと輝かせて質問を投げかける。

「そのジャパニーズの戦闘能力を計算したことがありますか？ その男の思考回路を解析したことがありますか？」

「うるさいヤツだな。ボクの友愛脳の前にはそんなものクソの役に立たない」

「……これは失礼しました。教皇様こそ世界一の頭脳の主。紫電など相手ではありませんな」

「分かればいいのだ。研究を続けるのだ」

その時、鳩川の携帯が鳴った。

「ああ、ボクだ。総長、お前はボクのアゲが分からないのか？」

ぶつぶつと呟きながら鳩川は研究所から出て行った。

鳩川を見送ると、アルベルト博士はくつくつと笑い出す。

「『紫電』……最高の素材だ。生きているなら何としても見つけ出さねば……。そうすれば私の研究はさらに進む」

博士は狂気を孕んだ笑みを浮かべたまま、『小川一郎』と書かれたネームプレートがあるフラスコへと歩いていった。

第二話：金色の瞳（後書き）

こんにちは、Jokerです。

第二話目です。

少し修正を加えました。

鳩川紀夫君が絶好調です。誰か止めてくれ（笑）

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

俺は北京民主共和国北西部のウイグル地方で生まれた。

与えられた名前はx x x。俺はこの名前が大嫌いだったから、今は『ジョーカー』と名乗っている。

何でかって？

この名前を思い出すたびに俺は人間が怖くなるから。

これはずっと俺が意識の奥底に封印していたかった記憶。

これはずっと俺が解放されたいと思っていた記憶。

それを日記として綴ってみようと思う。

気軽に読める話じゃないかもしれないけど、読んでくれると嬉しい。

「何やってんだい！ また失敗したのかい！」

罵声とともに暴力が俺に襲い掛かってくる。

これは俺の少年時代の習慣だった。ヒステリックな母親に厳格な父親。躰と称しての暴力などは日常茶飯事だった。

何か不手際や気に入らないことがあれば俺を殴る蹴る。暴言を吐きまくる。

『お前なんかは生まれてこなければ良かったんだ』

『無能だ。無能には生きる価値なし！』

これは俺の物心がつく頃からの習慣だった。

小さな俺はただひたすら泣いて、それに耐えた。

首を絞められてナイフで突かれそうになったこともある。棍棒で何発も殴られたこともある。虐待されたことがバレたからという理由で何日も食事を与えられなかったこともある。

そんな荒んだ少年時代を送ってきた。

怖かった。

辛かった。
苦しかった。

誰かが助けの手を差し伸べてくれるのを怯えながらずっと待っていた。

ある日、シルクロードを通って若いジャパニーズが訪れた。確か、俺が十五歳の頃だったと思う。

「おや、君はすごく傷ついているね」

その夫婦は俺を見るなり、薬を身体に塗ってくれた。痩せこけた身体にやけに沁みた。

「あ、あ……」

言葉に出来ない。

「怯えなくていいんだよ。私たちは君に危害を加えない」

俺の心を読んだように若い男は微笑む。多分俺の目は恐怖に満ちていたのだろう。俺に近づいてくるといえば暴力を振るう以外のこととはなかったのだから。

「ただの行商人なんだ。この村の長はどこにいるのかな？」

俺は言葉を発することが出来ず、村長のいるテントを指差した。

「ありがとう」

若い男は頭を軽く下げると、そのテントに向かって歩いていった。

若い女は俺の傷の手当てをしてくれる。

何故だろう。怖い。何かされる？ 俺が悪いの？

目があわせられなかった。

若い男が戻ってくると若い女と何やら話しこみ、しばらくした後俺にこう言った。

「すまない。私たちはもう行かないと。君を保護してあげたいのは山々なのだが……」

「き、き……に、しな……くて……いい」

やっこの思いで言えたのはこれだけだった。

若い女は俺をきゅっと抱きしめると、俺に掌よりも一回り小さな布袋をくれた。

「これは『お守り』といって、私たちの国で厄除けに使われているの。あなたに幸多からんことを」

女は祈ってくれた。

何故、無関係の俺にそんなことをしてくれたのか。当時は分からなかった。

若い男女が村から出ようとする時に俺の人生を決定的に変えた事件が幕を開けた。

「貴様ら、ウィーゲル族だな？ 北京民主共和国キム様の命により貴様たちを粛清する！」

大量の兵士が村を取り囲んでいる。

巨大な戦車や飛行艇を動員して。

「お前たち異民族は俺たち北京民主共和国様に黙って従っていれればいいものを。先月キム様に税の免除を願い出るなどとふざけた行為をしておつて。全員、死を以って償うがいい！」

司令官と思しき中年の男が叫び終わると同時に砲弾と銃弾の嵐が村に襲いかかった。

番外編：Another Story of Joker? 〈嵐の来る前〉

こんばんは、Jokerです。

ここでは第二部の主人公ジョーカーの番外編をお送りします。
かなり長いので分割してアップします。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

第三話：鷲色の瞳

「……何かさあ、もうネタだよなあ」

ジョーカーはギルドの地下食堂で食パンをかじりながら、朝刊に目を通していた。

世界三大邪教の撲滅を国連が決定したという見出しがでかどと躍っている。

「そうですねえ。でも、三大邪教というわりにはあまり有名でもない気がするけど」

娘はビールを運びながら、答えた。

「世界三大邪教ってのはルエビザ教、ミンス真理教、そして友愛教か。いかにも胡散臭いけど、まあ鳩川が作ったのがあるんだから納得だな」

「そういうものでしょうか？」

「そういうもののなの。一回アイツの護衛したことあるんだけど、マジで狂ってるよ。何がって、思考全てが。『愛が最強だ』とか『友愛は宇宙の真理だ。ボクの愛は国を超えて宇宙へと飛び立つのだ』とか。毎日言ってるんだぜ、これを。聞いているこっちがおかしくなっちゃうよ」

だらだらと三十分ほど話した後、ジョーカーはのんびりとギルドから出た。

「どうするかねえ。やべえ、あんまり係わり合いになりたくない気がしてきた」

ぶらぶらと街をほつつき歩く。抜けるような蒼い空。ほんの少しだけある雲は東へと流れていく。

「紫電、か。俺は結局アイツに追いつけたのだろうか」

答えは誰でもない自分が握っていることを彼はまだ知らない。

アルベルト博士は黙々と地下の研究施設で働いていた。昼夜を問わず、彼はここから出ない。何かに憑かれたかのように仕事に没頭

した。専用の個室で紫電に関する記録や『羅生門』のデータを読み漁り、狂ったような笑い声を放っている。

「これが、これが、これが『紫電』。人類最強最高のスペックを持つ新生人類のプロトタイプにふさわしい」

身をよじらせて、博士はパソコンの画面上に映し出された紫電の顔を見た。

「ああ、何としても手に入れなければ。鳩川紀夫などという愚物を利用した甲斐があつたよ」

アルベルト博士は鳩川に電話を入れる。

「教皇様、強化兵士が完成しました。至急、向かわせますので『ゲシュペンスト』本部でお待ちください。なお、『小川一郎』の完成にはもう少し時間がかかります」

うやうやしく報告を入れると、彼はまた笑い出した。

その狂った笑みは一晩中終わることはなかった。

鳩川はアルベルト博士から連絡を受けると、『ゲシュペンスト』本部にいる総長と面会した。総長室にある質素な机に鳩川は総長と呼ばれる男と向かい合って座る。

「総長、ボクの愛はキラキラだろう？」

「ミスター鳩川、わけの分からないことを言っていないで仕事の話といきましょう」

総長は銀髪をオールバックにしてサングラスをかけている長身痩躯の男だ。年齢は三十ほど。常に白いシャツと黒のスーツを崩して着こなしており、額から右頬に向かって斜めについている刀傷が特徴である。

「ボクは愛の大帝鳩川紀夫だ。ママがいなくてもボクは愛に満ち溢れているんだぞ」

「……仕事がないならお引取りを。小生はこれでも忙しいのでね」
表情を変えずに総長は返事する。

「ふふん。ロンメル総長もボクの愛を理解し切れていないと見えるな。まあいい。今回の仕事は警察機構の襲撃だ。友愛精神のない警

察どもを友愛すのだッ！」

「おや。警察機構までも敵に回していいのですかな？ 目的はさしずめ強化兵士のテスト、といったところでしょうか？」

おどけた口調で答える。しかし、目は笑っていない。

「察しがいいな。子ども手当てをやるぞ」

「いりません。ところで、小生の要求も呑んで頂けるのでしょうか？」

サングラスの奥で瞳がざらりと輝く。その鋭利な瞳で鳩川を見た。「もちろんだ。友愛の伝道師たるボクが約束を破るなんてことはありえない」

「……我々には事を為すのに十分な兵力と技術、そして軍事力がある。『ノア計画』の遺産を握っているのですから、約束を反故にしたときには……分かっていきますね？」

「心配するな。ボクは稀代の名首相として日本で豪腕を振るつただ。任せておけッ！」

「信用ならないのですよ。あなたは騙すことには天賦の才をお持ちだが、約束を守ることはまるで向いていない。……まあいい。この契約が終わったら、『ゲシュペンスト』活動を再び凍結します。たとえ大金をもらったとしても、あなたに利用されるのは我々の本意ではない。それに活動中に謎の人物に我が組織の構成員が拉致されるという事件もおきている。あなたに関わってから、ね」

ロンメルはサングラスを外した。

鳶色の瞳が現れる。

「ぼぼぼぼ、ボクは何も知らないぞ。秘書がやったんだ」

「リヒャルト副長、についてもですか？」

「そうだ。ボクの思いはお前にも届いているはずだ」

「残念ながら。ともかく、リヒャルトの存在を知る人物がいるとは思えませんし、ましてや拉致となると相当な手練のはず。さらに、『ゲシュペンスト』を騙っている不貞の輩もいるようでしてね。それらの内偵を今後進めます。では、今回お受けした仕事はお任せく

下さい」

静かに述べるとロンメルはサングラスを再び身に付けた。

ジョーカーは一日中情報収集をしたが、これといった手がかりを得ることもなくギルドに帰還した。

「ああもう。足がくたくただよ……」

受付デスクには娘が立っていた。

「おかえりなさい」

娘が素っ気無く出迎える。

「情報、集まらねえ……」

「そんなことだと思っていました。情報収集のプロに今動いてもらっているんです。その人が得た情報を元に鳩川紀夫拘束に向かってください」

「悪いね。さすが受付嬢」

「コレットです」

「さつすがコレットちゃん」

「ちゃん付けはやめてください。ともかく、ムラサメ村雨さんの情報で動いてください。そして今後、あなたと二人一組で行動するように。これは日本政府からの命令です」

「へいへい。村雨ねえ。ジャパニーズ？」

ジョーカーは少し身を乗り出した。

「そうらしいです」

「そういえばさ。紫電っていうヤツの噂、聞いたことない？」

「紫電……あの『クイーン』事件の解決者の一人ですね。さあ……あれから行方不明になっているとしか」

ジョーカーは肩を落とした。

「そうだよな」

倒れるように近くにあったソファに座る。

「出来たら、生きているなら、もう一回アイツに会いたいもんだな……」

その呟きは誰にも聞こえなかった。

第三話・鷲色の瞳（後書き）

こんばんは、Jokerです。

アルベルト博士にロンメル総長と二人の人物を新たに出しました。
彼らは今後どう動くのか？

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

第四話：暗幕の会談

顔全体を包帯で巻いた男がギルドに入ってきた。左目だけはあけてあり、そこから不気味に鋭い瞳が姿を見せている。瞳しか見えないためか年齢は分からない。

蒼い忍び装束を纏っている男は静かにコレットの方に歩いていくと、紙を一枚差し出した。

「お疲れ様でした。ジョーカーさん、この人が村雨さんです」

ソファで寝転んでいたジョーカーはけだるそうに身を起こした。

「ああ……って、ミイラ男?!」

素っ頓狂な声を上げる。

「失礼ですねえ。せつかく情報を持って来てくれたというのに」

「……」

当の本人は何も話さない。ただただ沈黙を守っている。

「ハジメマシテ、俺はジョーカー。よろしく」

何の返事も返ってこない。

「まあいいや。何か事情があるんだろうし。じゃあ、情報有難く頂
くぜ」

ジョーカーはコレットから紙切れを受け取った。

そして、ギルドから出て行った。

入り口のドアから漏れる陽光は今日も明るかった。

アルベルト博士は今日もいつもと同じように専用の研究室にこもっていた。

痩せこけた頬が生々しく、肌は荒れている。

逆に瞳だけはぎらぎらとしていた。

「A・H、機動実験には成功した……同時に自我の存在を確認することが出来た。実験体でこれなら、『クイーン』を復活させることも不可能ではない、か」

身を擦じらせて笑う。

電灯に照らされて映る影は化け物のように見えた。

「世界帝国の実現……新しい人類の創出、新しい惑星への転換……これなら出来るぞ。私の時代に」

そこに研究室のドアを開けて、ある人物が入ってきた。壮年の男で旧ドイツ軍の軍服を纏っている。特徴といえば卍に似た腕章を右腕にかけていることだ。

「おはよう。A H、どうだね気分は？」

「最悪だよ。君、私がどんな気持ちなのか推察したまえ」

「分かるよ。君は君であつて君でない。そんな気分だろう？」

「ところで、頼みというのは何だね？」

「ああ。実はね、『雷電』というもののDNAデータを取ってきてもらいたいのだ。イタリアのジェノヴァに行けばあるだろう。そうだな、教皇庁が最も確実かな」

「この私を使い走りにするとはな。よかろう」

「すまないね。仮にも世紀の独裁者と言われた君を酷使してしまつて」

「構わん。私はこの世に第三帝国を作り出すことが出来るのだ。気にしないでくれたまえよ」

壮年の男は室内を歩き回る。

「ところで、君の望みは何かね？ この私を『蘇らせた』程度のことではないのだろうか？」

博士はくつくつと笑った。

「さあ、どうか。私はただの研究者に過ぎないからね」

「とぼけるのも大概にしたまえ。君のことは調べさせてもらった。これでも一国を率いていた身。なめられては困る」

博士の笑いが消える。

「君はドイツでは知られていないが、イギリスでは『終末の邪教徒』と呼ばれているそうじゃないか。イギリス国教会のお尋ね者というわけだ。何をどうしてそんなことになったのかは推察するまでもない。禁忌の研究をしているからだろう。その内容までは言わない。」

が、EUも馬鹿ではない。君の未来も危ないのではないかね？」

金色の瞳が輝いた。

「くくく……邪教徒ねえ。懐かしい言葉だ。そして同時に褒め言葉でもある」

「何？」

「君に私の研究の全容を言うわけにはいかない。言ってしまったら面白くないだろう？」

「ふん。まあよからう。私の邪魔だけはしないでくれたまえよ」

「どうか。ところで勝手に動くのはやめてくれないか？ 強化兵士に混ざってギルドを襲撃するなどすべきではない」

「ほう、情報は既に入ってきたかね？ 手かがりも残してきた」

博士はびっくりとその言葉に反応した。

「……貴様、自滅する気か？」

金色の瞳はかつての独裁者をにらみつける。

「私は生きている証が欲しかったのでね。気に障ったのなら謝るよ」
「私の計画が潰れるのが気に入らないだけだ。私は貴様の『創造主』だ。それだけは忘れるな」

怒りに満ちた眼差しは依然として収まらない。

「君は何を憎んでいるのかね？」

金色の瞳に一瞬困惑の色が映った。

「油断ならぬヤツだな」

「君の言動を見ているとつい思ってしまうのだよ。私には君ほどの憎しみを抱えたまま生きるなど出来そうに無い」

博士は狂ったように笑い出した。

「いいだろう。君は創造第一号だから特別に教えてあげよう。私が憎んでいるのは『人間』そのものだ」

不穏な会談はまだ続く。

第四話：暗幕の会談（後書き）

こんばんは、Jokerです。

ここにも伏線たっぷりです。

といってもすぐバレるようなのですが。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

砲弾や銃弾は豪雨のように大地に降り注いだ。

炎を纏って踊り狂う人々、銃に撃ちぬかれ絶命する人々、兵士たち
に犯される女たち。

叫び声と怒号と悲鳴が錯綜する地獄のような空間が生まれる。

何分、何時間それが続いたのかは分からない。

俺は死体の下に埋もれていたから、銃で撃ちぬかれることがなかった。

幸運にも砲弾での爆撃を受けることもなかった。

爆音と轟音が止んだのを知ると、俺は生まれ育った地を見つめる。

赤色に染められ、人々がボロ雑巾のように殺され、北京民主共和国軍兵士が我が物顔で闊歩していた。

俺の知る地はそこにはない。

兵士たちは金目のモノを取り尽くすと、さっさと引き上げにかか
る。

「おい、このガキまだ生きてやがるぜ」

ほとんどの兵士が引き払った後、わずかに残った兵士が俺を見つ
けた。おそらく、ここの警備担当の兵士だろう。

「何だこのガキ、気に入らねえな。ちよっといたぶって殺してやる
か」

「ごつい銃を持って俺に歩み寄ってくる。

「ケケケ、どんな殺し方してやるうか？ 腕と足をまず引きちぎっ
て、それから指を全部切り落として食わしてやるうか？」

「待て待て、まずは全身切り刻んでだな」

「いやいや、初めは磔はりつけだろ。それから縛り首にするんだ」

兵士たちは残虐な笑みを浮かべている。

怖い。怖い。怖い。

このままだと俺は殺される。

もつまともな思考は出来ていない。

逃げようにも恐怖が俺を支配して逃げられない。

足が動かない。

手も動かない。

頭も機能しない。

兵士の一人が口を開いた。

「そついやよ、ジャパニーズの夫婦いただろ。あいつらも馬鹿だよな。こんな辺境に来なければ殺されることもなかったのによ」

「まったくだ。女の方は絶品だったぜ。あの女を押さえつけて犯し尽くしたのは最高だった。まあ、強姦まわしすぎて最後は壊れちゃったけどなククク」

「日本はまもなく日本自治区になって、俺たち北京民主共和国のものになるんだ。女をどうしようが、何しようが俺たちの勝手なんだから。鳩川友愛首相と小川一郎司令官さまさまってやつだ」

ぶつん。

俺の中で何かが切れた。

壊れた俺を優しく包み込んでくれた人たちをよくも殺しやがったな。まるでモノを扱うように汚し、獣のように。

多分その時俺の瞳は人間のものではなかったのだらう。よく覚えていないが。

「……す」

「あん？　なんだこのガキ」

「こ……す」

俺は地面に落ちている銃を拾った。

「お前ら！！　全員殺してやるぞ！」

自分が放ったとは思えないくらいの大声で叫んだ。

そして気付いたときには俺の周囲には死体しか転がっていないかった。

「俺、人を……殺した……」

ぺたんとその場に座り込む。

自己防衛のためとはいえ、足が震えた。
心も震えた。

そして次に涙が出てきた。
大声で泣く。

やっぱり心が痛い。本当は本当は人殺しなんかしたくなかったの
に。

親に殴られるだけでこんなに痛いのに、銃で撃ちぬかれたらどれ
だけ痛いのだろう。

道半ばにして倒れるのはどれだけ心が痛いのだろう。

俺にはまだわからない。

事件後しばらくして、俺は東アジア連邦政府に保護された。

偶然倒れているところを連邦政府のお偉いさんに発見されたのだ
そつだ。

そこで俺は孤児院に入り、学校に入って教育を受けることになる。
十七歳になった頃、政府のお偉いさんから話があった。

「お前、銃の腕は確かだな。どうだ、私の用心棒バウンサーになってみないか
？」

そのお偉いさんはアンコール軍務大臣。

あらゆる面で今まで、俺の世話を焼いてくれた人だ。

「はい！喜んで」

俺は二つ返事で快諾した。

あの日の、ジャパニーズのことが忘れられなかった。

弱い俺に手を差し伸べてくれたことが。だから、俺も強くなって
いつか誰かに手を差し伸べることが出来るようになりたいと思うよ
うになった。

力がほしい。もっと強い力が。

アンコール大臣のためもあるが、力を求めて俺は用心棒になった。
獲物はもちろん銃。軍部の誰よりも銃の扱いは長けていた。

そして、ある日俺は伝説の暗殺者に出会う。

世界最強とも言われ、ターゲットを恐怖に陥れる『零』という暗

殺者了。

番外編：Another Story of Joker? 〈幼き日の惨劇〉

こんばんは、Jokerです。

書き溜めておいた番外編をアップします。

ジョーカーの過去をこれから少しずつ明かしていきます。

零との出会いも。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

第五話：独裁者の最期

「とまあ、こんなところだね。私の過去話は」

三十分ほどの演説の後、アルベルトは部屋でコーヒーを淹れた。
「驚きを禁じえないな」

「コーヒーを一口含む。」

「いいかね、AⅡH。私はね、『愚かな』人間が嫌いなのだよ」
アルベルトはくつくつと笑いながら話し始めた。

「『愚かで』『もろくて』『欲望にまみれた』人間は嫌いなのだ」
「ふむ。では、どんな人間が良いのかね？」

「そうだね。究極の知性と理性を持ち、さらには極限まで高められた筋力と運動力を持つ者が望ましい」

AⅡHは唾を飲み込んだ。額から汗が吹き出る。

「き、君は一体何をしようというのだね。そもそも、君は」

「私は人間に過ぎない。ただ、人間を超えようとしている人間だ」
創造物の発言を遮って答えた。

「ヒトラー君」

アルベルトは初めて名前で呼んだ。

「何かね？」

「君は『第零機関』を埋め込んだ、新生人類のプロトタイプだ。君には力がある。人間を超える力がある。さて、それをもってどうするね？」

作られたヒトラーはすぐに答える。

「そんなものは決まっている。かつて為しえなかった第三帝国の再興だ。我がドイツが世界最強の国となるために」

アルベルトはそれを聞くと身体をよじって笑った。

「それで、また争いを繰り返すのか？」

「そうだ。争いは人類の歴史そのもの。争いの無い歴史などありえない。我々は動物なのだから」

「愚かな、といっておこうか。争いの無い歴史をこれから作るのだよ。それにはこの『第零機関』が役に立ってってくれる。思考回路そのものと肉体構造そのものを変えることが出来れば、実現できる」
「それこそ狂っている」

「私が狂っているかどうかは歴史が証明してくれるだろう。これでは話が終わるだ。早速任務へ向かってくれたまえ」

二人の会談は終わった。

ジョーカーは村雨の情報を元に郊外の地下研究所へ向かった。

薄暗い研究施設の中には不気味なフラスコが多数あり、薄いオレンジ色の液体が溢れている。人の気配はしない。

ジョーカーはコンクリートの大地に足を付けて歩き始めた。白いスニーカーは靴音を抑えながら移動する。

「うげえ……ホントにいい趣味してるよ」

銃を構えつつ、ゆっくりと歩を進める。

フラスコの中に『小川一郎』というネームプレートがつけられたものがあつた。

「あの悪党の名前か」

フラスコの中にはジョーカーの知る小川一郎本人が入っている。

「あのヤロウのクローンでも作ってるのか？」

「こんこんとフラスコを叩く。」

「それに触らないでもらおうか？」

アルベルトがゆらりとそこに現れた。ライトが灯る。

「誰だ、アンタ？」

「失礼な若造だね。私を知らないのか？」

「オッサンの面覚えてるほど頭良くはないんでね。綺麗なレディなら覚えるけど」

アルベルトは表情を歪ませる。

「愚かな人間は嫌いなんだ。消えてもらおうか？」

「何だ？ 見たところ武装もしていないし、ガタイがいいだけだろ。俺を倒せるとでも思ってるのかよ？」

ジョーカーは嘲笑う。

「思っているよ」

「なら、見せてもらおうか？」

アルベルトは『小川一郎』と書かれたフラスコについているボタンを押した。

「さあ。起きたまえ、『小川一郎』君」

フラスコの中の液体がぬけていく。

そして、フラスコのガラスを破って『小川一郎』が出てきた。ぎよろりとした目は生気がない。

かつてのような野心と悪意に満ちた眼差しもない。

「テメエ、こいつは何だ？」

「『小川一郎』だよ。日本国を朝鮮連王国と北京民主共和国に売り飛ばした、稀代の売国奴。鳩川紀夫とともに日本国沈没に向けて尽力した人物」

「どう見ても様子がおかしいぞ」

ジョーカーは険しい顔になる。巨大なショットガンを構える。

「そうとも。彼は『第零機関』の実験体サンプルとなったのだからね。もう君の知る小川一郎ではない。新生人類のプロトタイプだよ」

アルベルトは高い声で雄たけびをあげるように笑う。

「講釈垂れんのはそれだけか？ ついでに答える。ここに鳩川紀夫とかいうクズがいるはずだ。どこにいる？」

「ああ、あの愚物かね。『総長』のところへ行つたよ」

「『ゲシユペンスト』のか？」

「ああ」

「それをもらしてもいいのか？ テメエも構成員なんだろ」

ジョーカーは敵に気取られぬように背中に隠してあるハンドガンに左手を伸ばした。

「いいんだよ。組織なんてものは私にとって弾除けにすぎない。軍人崩れのロンメルなどは私と相性が悪いのでね」

「で、その総長とかいうのはどこにいる？」

「おいおい。状況が分かっているのかね？ 君が今すべきことは敵の撃退ではないかな？」

小川一郎はナイフを抜いて構えている。目は相変わらず虚ろでどこを見ているのか分からない。ジョーカーはハンドガンから手を離れた。

「さあ、新生人類の片鱗を見せてもらうよ。まあ、彼は思考能力を著しく低下させた戦闘力特化型だからね。『クイーン』を破壊した者どこまで渡り合えるか、楽しみだよ」

ジョーカーは赤髪を乱暴にかきあげる。

「下衆野郎が！」

唾を床に吐いた。

「何とでも言う方がいい。これは進化なのだから」

アルベルトは長身からジョーカーを見下ろした。

「さあ、サンプルよ。この男を足止めするのだ。私は一足先に自分のラボへ向かう」

ジョーカーはショットガンで殴りかかったが、小川一郎に阻まれる。がきんと鈍い金属音が鳴り響いた。

「あ……が……ら……くに……なり……た」

意識がわずかにある。

ジョーカーはショットガンを引いた。

アルベルトは優雅に一礼すると歩いて研究所奥に進んでいった。

しばらくすると、小川一郎は頭を抱えて吐血した。

ふらふらと歩き回る。

瞳はやはり焦点が定まらず、口からはだらだらと血の混じった涎をこぼしている。

「たすけ、て……クレ。もう……自分が、自分で……なくなる前に何度も何度も呟いた。

「分かった」

ジョーカーは表情を歪めて、ショットガンの照準を小川一郎に合わせる。

小川は必死で『第零機関』に抗っていた。たぎる戦闘衝動を押さえ込み、己の脳の指令を聞かない身体を押さえ込む。

「今、楽にしてやる……」

小さな声で応えると、一発の銃声が響いた。

第五話：独裁者の最期（後書き）

こんばんは、Jokerです。

第一部最後らへんで出した伏線の回収です。

実は小川一郎は改造人間にされていた、というオチでした。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

第六話：第零機関

レオンハルト・ヴィルヘルムはドイツ陸軍中將となっていた。

三十代にして將軍に上り詰めた異例の人物として知られている。しかし、特に有能というわけではない。軍功があるというわけでもない。不思議な人事に疑念を抱かない人はいなかった。

レオンハルトは『ゲシュペンスト』のロンメルに秘密裏に再三軍に戻るように依頼をしていた。というのも、元々ロンメルは軍の間だったからだ。

数年前のこと。軍部の汚職事件が発覚すると、当時大尉だったロンメルは迷い無く軍を辞した。それは己の求める軍の姿とかけ離れていたからであり、自らの理想を追い求めることが出来ないと考えたからだだった。

ロンメルは軍を辞める時にこう言った。

『レオンハルト殿。私は国のために、この国の人々を守るために軍に入りました。しかし、今軍部は国民ではなく己の保身ばかりを考えている。この場所にこの身を置く事は出来ません』

レオンハルトは掛ける言葉を失い、見送る。

五年以上前の出来事をロンメルは自宅の椅子に座りながら思い出していた。

軍を辞め、自暴自棄になって『ゲシュペンスト』に入った。

その戦闘手腕と判断力からトップにまで上り詰める。元々優秀なロンメルには容易いことだった。

「小生は一体何をしているのだろうか」

悶々とする日は続く。

鳩川からの依頼を受け、それをこなしたがその後のことは考えていなかった。

『ゲシュペンスト』の解散。それは胸中では決まっていた。アルベルトの行動があまりにも不審すぎる。それを調査し、その中間報告を受けた時から。

自分はここにいるべきではないとずっと考えていたからである。それよりも鳩川から紫電という若者の話を聞き、紫電について調べてみたことで己の進む道を真剣に悩み始めたことが大きかった。

国のため。国民のため。この身は護国の鬼となる。

いつもロンメルが軍人時代に口にしていた言葉である。

それは彼の誇りでもあった。

「我に七難八苦を与えたまえ」

ロンメルは椅子から立ち上がると身支度をして、家から出た。

行き先は『ゲシュペンスト』本部。

組織の解散を告げるために。

鳩川紀夫は今日もふらふらと歩き回っていた。

母親から受け継いだ財産を使い、悠悠自適の生活を送っている。たまに高級クラブでハメを外しては追い出されるということを繰り返しながら。そのため、あまりの愚かさ具合に最近では『ルーピー』と揶揄されることも少なくない。

鳩川はアルベルトを全面的に信頼していた。

強化兵士の作製、自分の護衛。

己の身を守るために金さえ払えば何でもしてくれる。

利害関係は一致していた。

鳩川にはある計画があった。それは友愛教団による日本制圧。

日本制圧のための軍事力として強化兵士を作り、アルティマティウムを改造し『第零機関』を使った超人の作製を画策している。それが成った暁には日本は簡単に制圧できると考えていたのである。

事実、『第零機関』には無限の可能性が秘められていた。逆に言えば、ブラックボックスがかなり多く存在するということである。そのため、危険性もある。

鳩川はそれを無視した。

愛があれば何も無い。愛を信じれば奇跡は起こると本気で信じていたのである。信じられない話だが。

アルベルトは鳩川に『第零機関』完成の報告をしていなかった。元々アルベルトにとってはパトロンとしての魅力しかなく、発明品を独占したいという意味があつたからだ。

鳩川はアルベルトの掌で踊っていた。

ロンメルは『ゲシュペンスト』本部でアルベルトの所属する研究チームを除いた全員に告げた。

「本日、この時を以って『ゲシュペンスト』は活動を永久停止する。地下に作られたレンガ造りの広場によく通る声が響く。

「各々、己の目標を追い求めよ。己の理想を追い続けよ」

それだけ言うと、ロンメルは言葉を止めた。

構成員からは一言も反応が無かった。

ロンメルは早々に家に戻ると、納戸にしまっている刀を取り出す。その日本刀はかつて大尉時代に剣術を教わったジャパニーズから贈られたものだった。

「懐かしいな。あの頃は青い理想に燃えていたな」

刀を抜く。

しつとりと湿ったような薄い青色の刀身が顔を見せた。

「今再び。護国の鬼とならん」

刀をベルトに引っ掛けるように差す。

そして、アルベルトのラボへと歩を進めた。

第六話：第零機関（後書き）

こんばんは、Jokerです。

第二部の鍵を握るロンメル総長を動かしました。

モデルは台詞から察していただけだと思います（笑）

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

初めての任務はアンコール大臣の護衛だった。

俺は得物のショットガンを手に、ウィーゲル地方まで歩く。

というのも、今回アンコール大臣はウィーゲル独立軍と同盟を締結しに行くのだ。ここのところ、ウィーゲルでは北京民主共和国に対するテロが続いていると聞く。

「あんまり張り切りすぎるな」

落ち着いた様子で大臣は言う。

彼は交渉の席に着く時はグレーのスーツに紅いネクタイを締めている。赤色に思いいれがあるのだとか。

それはさておき、俺は無事にウィーゲルの地方都市イスカランダリアまで護衛することに成功した。まさか、生まれた国に戻ってくることになるとは。

時刻は夕方。宿を取り、交渉を明日に控えた時に入り口を護衛していた部隊の兵士が一人叫び声を上げた。

「零だ！ 零が現れた！」

零という名前は初めて聞く。

「ジョーカー。気をつける。世界最強の暗殺者と呼ばれる男だ」

俺はとりあえず屋上に大臣を退避させる。

そして宿のドアを開けて外に出た。

「おやおや、意外に若いな。護衛隊長殿か」

三十歳くらいの短身痩身の男が短い刀を構えている。あれが忍者刀というものだろうか。

端正な顔立ちに背中まで届く漆黒の髪。それに予想していたよりもずっと穏やかな瞳をしている。これがあのジャパニーズだということのか。

大地には兵士たちが倒れていた。しかし、死んではない。

「アンタが、零か？」

「そつだ」

短く鋭い答え。その黒い瞳は凄まじい殺気を放った。さっきまでとは雰囲気全然違う。

どくん。

一瞬、あの日の光景がフラッシュバックする。

これが『怖い』ということなのか。

俺は両足が震えるのが分かった。

怖い。怖い。怖い。

駄目だ。恐怖心だけは抑えられない。

何よりも俺は自信が無い。この男に勝つという自信がない。

「臆するな。晩節を汚すぞ」

凜とした声。

「せめて、悔いは残すな。そのためにも全力で立ち向かえ！」

落ち着け。俺とヤツとは五メートルほどしか離れていない。近接戦闘は俺が最も不得手とするところだ。それに銃の特性上、近距離戦はまずい。ヤツなら銃の弱点など知っているだろうから近接戦闘に持ち込むだろう。

予想通り零は高速で接近してきた。

一撃目の刃を銃身で受け止める。

みしつと銃のきしむ音がした。

「反応はなかなかだ」

ヤツは笑いながら一旦飛びのいた。

「これはどうかな」

一瞬で姿を消したかと思うと、天井を跳躍して襲い掛かってくる。これも何とか銃身で受け止める。しかし、体全体に重い衝撃が伝わってきた。

身体は俺よりも小さいはずなのに。

斬撃を一撃放つたびに飛び下がる。

おかしい。ヤツの忍者刀は近距離での差し合いが有利なはず。

「お前を見ていると、俺の弟子を思い出すよ。年齢も同じくらいだ」

急に柔らかい物腰で言い出した。

「だが、任務は任務。悪いが遊びはこれでおしまいだ」

その声が聞こえたのとほぼ同時に視界が暗転した。

気がついたのは大きな爆音がした時だった。左わき腹が痛む。

そうか、俺は零に倒されたのか。

それにしてもあの大きな音は何だろう。

ホテルから出てみると目の前ではオレンジ色の炎が街を支配している。

空を埋め尽くさんばかりの戦闘機がごうごうと飛んでいる。

戦闘機は北京民主共和国のものだろう。

テロ鎮圧に来たということは容易に想像できた。

「そうだ。大臣、大臣はどこだ」

俺は銃を拾い上げて、屋上へ向けて急ぐ。

階段を上って屋上へたどり着くと、そこには血まみれの零が立っていた。

番外編：Another Story of Joker? ～零との邂逅～

こんばんは、Jokerです。

とうとう出ました、零師匠。

最初は出す気がなかったんですが……

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

第七話：過去からの贈り物

レオンハルト・ヴィルヘルムはドイツ陸軍中將となっていた。

三十代にして將軍に上り詰めた異例の人物として知られている。しかし、特に有能というわけではない。軍功があるというわけでもない。不思議な人事に疑念を抱かない人はいなかった。

レオンハルトは『ゲシュペンスト』のロンメルに秘密裏に再三軍に戻るように依頼をしていた。というのも、元々ロンメルは軍の間違ったからだ。

数年前のこと。軍部の汚職事件が発覚すると、当時大尉だったロンメルは迷い無く軍を辞した。それは己の求める軍の姿とかけ離れていたからであり、自らの理想を追い求めることが出来ないと考えたからだだった。

ロンメルは軍を辞める時にこう言った。

『レオンハルト殿。私は国のために、この国の人々を守るために軍に入りました。しかし、今軍部は国民ではなく己の保身ばかりを考えている。この場所にこの身を置く事は出来ません』

レオンハルトは掛ける言葉を失い、見送る。

数年前の出来事をロンメルは自宅の椅子に座りながら思い出していた。

軍を辞め、自暴自棄になって『ゲシュペンスト』に入った。

その戦闘手腕と判断力からトップにまで上り詰める。元々優秀なロンメルには容易いことだった。

「小生は一体何をしているのだろうか」

悶々とする日は続く。

鳩川からの依頼を受け、それをこなしたがその後のことは考えていなかった。

『ゲシュペンスト』の解散。それは胸中では決まっていた。アルベルトの行動があまりにも不審すぎる。それを調査し、その中間報告を受けた時から。

自分はここにいるべきではないとずっと考えていたからである。それよりも鳩川から紫電という若者の話を聞き、紫電について調べてみたことで己の進む道を真剣に悩み始めたことが大きかった。

国のため。国民のため。この身は護国の鬼となる。

いつもロンメルが軍人時代に口にしていた言葉である。

それは彼の誇りでもあった。

「我に七難八苦を与えたまえ」

ロンメルは椅子から立ち上がると身支度をして、家から出た。

行き先は『ゲシュペンスト』本部。

組織の解散を告げるために。

鳩川紀夫は今日もふらふらと歩き回っていた。

母親から受け継いだ財産を使い、悠悠自適の生活を送っている。たまに高級クラブでハメを外しては追い出されるということを繰り返しながら。そのため、あまりの愚かさ具合に最近では『ルーピー』と揶揄されることも少なくない。

鳩川はアルベルトを全面的に信頼していた。

強化兵士の作製、自分の護衛。

己の身を守るために金さえ払えば何でもしてくれる。

利害関係は一致していた。

鳩川にはある計画があった。それは友愛教団による日本制圧。

日本制圧のための軍事力として強化兵士を作り、アルティマティウムを改造し『第零機関』を使った超人の作製を画策している。それが成った暁には日本は簡単に制圧できると考えていたのである。

事実、『第零機関』には無限の可能性が秘められていた。逆に言えば、ブラックボックスがかなり多く存在するということである。そのため、危険性もある。

鳩川はそれを無視した。

愛があれば何も無い。愛を信じれば奇跡は起こると本気で信じていたのである。信じられない話だが。

アルベルトは鳩川に『第零機関』完成の報告をしていなかった。元々アルベルトにとってはパトロンとしての魅力しかなく、発明品を独占したいという意味があつたからだ。

鳩川はアルベルトの掌で踊っていた。

ロンメルは『ゲシュペンスト』本部でアルベルトの所属する研究チームを除いた全員に告げた。

「本日、この時を以って『ゲシュペンスト』は活動を永久停止する。地下に作られたレンガ造りの広場によく通る声が響く。」

「各々、己の目標を追い求めよ。己の理想を追い続けよ。」
それだけ言うと、ロンメルは言葉を止めた。

構成員からは一言も反応が無かった。

ロンメルは早々に家に戻ると、納戸にしまっている刀を取り出す。その日本刀はかつて大尉時代に剣術を教わったジャパニーズから贈られたものだった。

「懐かしいな。あの頃は青い理想に燃えていたな」
刀を抜く。

しつとりと湿ったような薄い青色の刀身が顔を見せた。

「今再び。護国の鬼とならん」
刀をベルトに引っ掛けるように差す。

そして、アルベルトのラボへと歩を進めた。

第七話：過去からの贈り物（後書き）

こんばんは、Jokerです。

今後、仕事の都合で更新頻度が下がります。

ご了承ください。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

零は血まみれになって空を見上げていた。

朱に染まる夕焼けの空。

そしてそれを覆う灰色の戦闘機たち。

「大臣！」

俺は飛び出した。

空からの機関銃が俺の前に降り注ぐ。

「危ないぞ、少年。いや、ジユチハルディア」

何故、俺の本名を知っているんだ。誰にも明かしたことはないし、政府の連中でさえ知らないのに。

「アンタ、何者だ？」

得体の知れない暗殺者に問いかけずにはいられない。この男には違和感を覚える。そう、俺はこの男に興味を持ったのかもしれない。

「俺は零だ。それ以外の何者でもない」

零の前にはアンコール大臣が倒れている。

「大臣！」

「来るな！」

零は鋭く言った。

俺の前に火炎弾が投下される。

「ごうごうと燃える炎が俺と零の前に出現した。それはコンクリートを少しずつ焦がしていく。」

「死んではいけない。安心しろ」

夕暮れの空が俺には血の色に染まっているように見える。

屋上から見える大地では一方的な虐殺が繰り広げられていた。

「無惨、だろ」

零が力なく口を開く。

「これが戦争であり、殺し合いなんだ。お前はこちら側へ来てはいけない」

俺とは違う誰かに言うように。

「そういつわけにはいかない。俺の任務は大臣を守ることだ！」

「血気盛んなのはいいが、現状を認識しろ。そして出来ることと出来ないことを即座に判断しろ。戦場では命取りになるぞ」

零は素早く背中を引いて、投げる。

それは寸分の狂い無く、戦闘機の動力部に突き刺さった。数秒と経たず、戦闘機は爆発する。

「お前一人でここを脱出するんだ。この男は怪我をして動けまい。

この男を抱えていたら、お前も危ないんだぞ」

「アンタ、大臣を殺したいだけなんじゃないのかよ」

「それもある」

なんて正直な男だ。暗殺者とは思えない。

「俺も任務があるんでな。とつとターゲット始末して帰りたいところなんだが……」

ヤツは上を見た。

「こんな状態を放っておけるほど冷酷でもない」

これが零の弱さであり強さなんだろう。人殺しになるには優しすぎる。

零は跳躍して戦闘機に飛び乗り、刃を動力部に突き立てた。その刃は不思議な緑色に光っている。あれが『羅刹』というヤツの獲物か。

戦闘機は煙を数秒上げると、爆発して墮ちて行く。墜落する前に零は次の戦闘機に飛び移り、同じように忍者刀を突き立てていく。

「これが、世界最強の腕か」

あっけにとられた。そこにいるのは人間ではない。人間の皮を被った何かだと思いたかった。それほど零の肉体能力は人間離れしていたのだから。

しかし、感心して見物しているわけにもいかない。

俺はアンコール大臣をとりあえず屋内に避難させた。

というか、何故ヤツは傷を負ったのだろうか。戦闘機と互角以上の

機動力。人間ではありえない戦闘力を有するヤツが何故傷を負うの
だろう。

その答えはすぐに見つかった。

気絶してはいたが大臣は無傷だったからだ。

きつと大臣を庇ったに違いない。本当に暗殺者アサシンなんかには向かない男だ。

「早く助けにいかないとな」

大臣を兵士たちに託すと、俺は屋上への階段を駆け上がった。

屋上にたどり着くと、不思議な人物がいつの間にか立っていた。

彼はにやりと笑うと、空を舞う零に見とれるような眼差しを送っている。

「素晴らしい。素晴らしいよ」

ガタイのいい白衣を着た壮年の男は空を見上げて拍手をしている。

「アンタ、邪魔だ。どいてろ」

俺はショットガンを戦闘機に向ける。

轟音とともに特製の弾を発射した。

戦闘機の動力部に命中すると巨大な爆炎が立ち上る。その機は火
炎に抱かれながら粉々に砕け散った。

「いやいや、気にしないで戦闘を続けてくれたまえ。君などには用
がないのでね」

腹をよじって笑う。気色悪い。

彫りの深い端正な部類の顔だが、アレは間違いなくマッドサイエ
ンティストだ。何となく分かる。

ほぼすべての戦闘機を駆逐すると、零は俺の前に降りて来た。

「少年、怪我はないか」

穏やかな微笑を湛えて安否をうかがう。

「大丈夫」

「そうか、君が零君かね」

白衣の男は零に歩み寄った。

「貴方は？」

その声には幾分かの警戒が混じっている。手こそ武器から離しているが、俺の安全を確認した時とは雰囲気が違う。

「私か？ つまらん科学者だよ。アルベルト・ヴェイルヘルムという」
自己紹介を終えると、奇妙な男は演説をするが如く滑らかに喋り出した。

番外編：Another Story of Joker? 〈戦場の少年〉

こんばんは、Jokerです。

この番外編もそろそろ佳境です。

加えて、ジョーカーの本名も出しました。

ジュチハルディアというのですがモデルはチングスハンの子（おそらく実子ではない）のジュチです。ジュチというのは客人という意味だそうです。詳しくはまた。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

第八話：影の動く頃

翌日の朝、ジョーカーは一旦ギルドに戻った。

そもそもアルベルトのラボがどこにあるのか分からない。

「コレットちゃん、あのミイラ男いる？」

愛想良く、受付に座るコレットに尋ねた。今日はグレーのスーツにタイトスカート。ぴちつとした服装だ。

「いません！」

帰ってきたのは無愛想な答え。

「もちつと愛想よくしようよ。お嫁の貰い手がげふう！」

強烈なビンタがジョーカーの頬に炸裂していた。

「さつき出かけていきましたよ。何でも重要な案件だそうで」

「あの男、ホントに何者？」

頬をさすりながら訊く。

「分かりません。経歴が一切謎、ですね。強いて言うなら、アジアの人になって思いますけど。肌の色が黄色でしたから」

二人の知らないところで計画は刻一刻と進められていた。

村雨は単独で、ある人物を追っていた。

ドレスデンに現れたという過去の人物。

ドイツを恐怖に陥れた独裁者、アドルフ・ヒトラー。

彼が生存しているという情報をギルドから入手したのである。

半世紀以上の時を越えて生きているなどありえない。

ドレスデンのギルドにベルリン総局から指令が下ったのはジョーカーがギルドに戻る数時間前だった。

総局からの指令を受けて、村雨はベルリンに向かう。

情報によれば、ブランデンブルグ門でヒトラーを見かけたというのである。

「……………」

ベルリンの中央総局に入ると終始無言で説明を受けた。

担当者は不気味なエージェントに困惑しながらもてきぱきと説明をこなす。

説明を全て聞き終えると、やはり無言で村雨は去っていった。時刻は夕闇が支配する頃。

村雨はブランデンブルグ門の下にいた。街の光が眩い。門も色鮮やかにライトアップされていた。

ブランデンブルグ門は黄色がかった灰色の砂石を使って作られた古風な門である。門といっても大きな扉がただ一つあるわけではなく、小さく区切られた五つの通行路が用意されている。

そんな風景の中で村雨はただ静かに待っていた。

手には忍者刀。

「物騒なものを持っているじゃないか」

かつてドイツを震撼させた男があの日と変わらぬ姿でそこにいる。

「……」

「言葉が話せないのかね？」

ヒトラーの着ているナチスドイツの軍服が風に揺れる。

答えは無言。

「そうかね。君とは仲良くやれそうだと思ったのに残念だよ」

ヒトラーは腰に差しているサーベルを引き抜いた。

同時に駆け出す。

金属がぶつかり合う音が鳴り響いた。

「なかなかどうして。運動神経が強化されているとは。アルベルト」
「め」

ぶつぶつとヒトラーは呟く。

村雨は獲物を狩る獣のように鋭い瞳を敵に向けた。

「久しぶりにいい緊迫感だ。戦はこうでなくてはな」

余裕の笑みで村雨の放つ斬撃を受け止める。

「せっかくだ。私の復活宣言でも聞いていくかね」

周囲にいる通行人がざわざわと騒ぎ始めた。

「ま、ここにいる無粋な輩にも聞いていただくのでしょうか」

心底楽しそうにヒトラーは言う。

「我が使命は第三帝国の再興！ そのために冥府より舞い戻った！
通行人を切り裂きながら独裁者は嘲り笑った。

「もろいもろい。斬られて死ぬ。それくらいで死ぬ。本当に下等生
物どもだ」

何人も何人も斬っていく。

その行為に躊躇いはない。

「それが貴様がここに現れたカラクリか」

村雨が初めて口を開いた。惨劇に逃げ惑う人々を見て、かすかに唇は震えていた。

そして顔に捲いていた包帯を剥ぎ取る。

「茶番は終わりだ。貴様はここで死ぬ」

包帯の下からは精悍な青年の顔が現れた。額には大きな傷がある。

「面白い。包帯を剥ぎ取ったくらいでどれほど違うのか、私が直々に確かめてやろうではないか」

「一分で殺してやる。かかってこい」

青年は緑色に輝く刀の切っ先を相手に向けて、柄についている引き金を引いた。

第八話：影の動く頃（後書き）

こんばんは、Jokerです。

ついにあのお方が出てきました。

誰かって？

ご想像ください（笑）

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

第九話：剣部隊

ジョーカーの元に一通の手紙が届いた。

『愚かなる銃撃士に告ぐ。今夜十二時にベルリン博物館館長室まで来られたし』

「こんな熱烈なファンがいるとは困るね」

へらへらとジョーカーは笑う。

「どう見ても挑戦状じゃないですか」

逆にコレットは呆れている。

「どうするんですか？」

「行くよ。差出人の名前見てみな。アルベルトってあるだろ。間違
いなくアイツだ」

ジョーカーは得物のショットガンを背負うと、ギルドから出て行
った。

アルベルトは正午頃には博物館へと入り込んでいた。
職員を皆殺しにし、館長室で優雅にコーヒーを飲む。

銅を削って作られたマリア像が紅い涙を流しながら彼を見つめて
いる。

「ふむ。まだ時間があるな」

館長専用の椅子に座り、足は机の上に放り出した。

「ああ、私だ」

携帯を取り出す。

「おや、これはこれは鳩川様。いかがなさいましたか？」
適当に相槌を打った。

「そうですね。ではすぐに『剣部隊』を派遣します。ええ。大丈夫
です。『羅生門』のデータは完璧ですから」

会話を終えると狂ったような笑いを浮かべた。

「あんな愚物のために『剣部隊』を使うとも思ったか」
そして夜が訪れた。

ジョーカーはベルリン博物館へと歩を進めた。深夜にも関わらず灯りがついている。

赤レンガで囲まれた三階建ての古風な博物館である。

木造のドアを開けて、入り口から入ると最初に目にとまったのは職員たちの死体。

「……何があつたんだ」

死臭がひどい。

壁にかけてある聖母子像は紅く染められ、ルネサンスの巨匠レオナルド・ダ・ヴィンチの作品はずたに切り刻まれている。

ジョーカーを迎えたのは顔を失った彫刻や価値と芸術性を失った絵画だった。

瞳をくりぬかれたモナリザ、胴体を失った聖母絵画が壁から来訪者を見下ろす。

そんな風景の中、赤いじゅうたんが敷かれた道を歩く。

館長室の前に着くと、部屋の中から声がした。

「ボクのを愛を受け入れないというのかッ！ ボクの友愛は世界を超えて宇宙へと飛び立つんだ！ 普天間問題？ 知ったことかッ！

ボクの腹案を受け入れないアメリカが悪いんだ」

「このクソ間抜けな声は鳩川紀夫か。ちょうどいい」

ジョーカーは木造の扉を蹴り開けた。部屋の面積は一軒家がすっぽりと入りそうなくらい広い。豪華な造りで、クリーム色で彩られた壁には歴代館長の写真が飾ってある。四方には観葉植物が、部屋の隅には来客用の机と椅子が置かれている。

「邪魔するぜ」

ショットガンを構える。

「鳩川、そこまでだ。大人しく捕まってもらおうか」

鳩川はジョーカーを見た。

目が今までになく虚ろだ。

「お前は、愛の使徒イソジンか？」

白色の光を放つシャンデリアが少しだけ揺れている。

「馬鹿野郎。よく見る」

「これはこれは。よく来てくれたね、ジョーカー。いや、ウィーゲルの生き残り、ジユチ「ハルディア」

アルベルトは椅子から立ち上がった。

白いワイシャツの上に白衣を纏っている。そして、下はグレーのスラックス。

「てめえ、どうして俺の名前を？」

「昔お会いしたことがあるだろう？　そうそう、『剣部隊』もいるんだが、挨拶するかね？」

ジョーカーの背後に一人の男が現れる。

「主役のボクを無視するなッ！　愛の帝王鳩川紀夫は普天間を乗り越えて友愛の国を世界に開くのだッ！　強行採決？　法律違反？

知ったことかッ！　ボクの愛は」

男は一瞬で抜刀すると、鳩川に得物を突きつけた。

鳩川はその場にぺたんとして座り込む。

「アンタは……」

「そう。君が最もよく知る男だよ」

かつての最強の暗殺者がジョーカーの目の前にいる。

「馬鹿な。アンタはあの時……」

「君の言いたいことは分かるよ。彼は死んだはずの人間だからね」
アルベルトは腹をよじって笑う。

「『烈風』 『月光』 『疾風』 『秋水』 そして、『零』。かつての最強暗殺部隊、剣部隊の再現というわけだ。これに紫電や雷電が加わればよかったのだがね。雷電はまだ開発中だ。楽しみにしていたまえ」

四つの影がゆらりとアルベルトの背後に現れた。

「おお。血に飢えているようだ。さあ、諸君！　この男を存分に鬪り殺すがいい。久々の戦闘にゾクゾクしているだろう」

そこに一筋の閃光が走る。

第九話：剣部隊（後書き）

こんばんは、Jokerです。

鳩川がこれからブレイクします。

It's 鳩川タイム！（笑）

ではまた次回（が鳩川のブレイクタイムです）お会いできることを
祈りつつ……

第十話：人間爆弾

「そんな劣化コピーを集めて喜んでいいのか。だから貴様は負け犬なのさ」

一瞬に放たれた四つの斬撃で四つの首が飛んだ。

鮮血が飛び散る中、精悍な顔つきの青年が姿を表す。

「やあ、紫電。待っていたよ」

アルベルトはにやにやとしながら客を出迎えた。

「悪趣味だな」

「よく言われるよ」

緑色に輝く忍者刀をぶんと振る。

「茶番は仕舞いだ。貴様はここで死ね」

「いいのかね。君の師匠が蘇ったというのに」

「偽物に興味はない」

紫電は作られた零を躊躇なく斬る。

それは音を立てて、地面に仰向けに倒れた。

「貴様の手駒はこれで消えた」

鋭い眼光をアルベルトに向ける。憎悪に歪んだ顔で狂った科学者を見上げた。

ジョーカーは目を見開いて動かない。銃を握る手は少し震えていた。

「テメエ……」

ジョーカーの小さな声が響く。

「人間はテメエの玩具じゃねえんだぞ！」

右手の拳を振り上げ、アルベルトに殴りかかった。

がつんと鈍い音がして、アルベルトは床に倒れる。

「何を言うかと思えば、そんなことかね」

口なら出た血をぬぐって立ち上がった。

「彼らは二度目の生を与えられたのだ。私に感謝しているだろう」

「俺ならアンタをぶち殺してるね」

「その辺にしておけ」

冷静な声がジョーカーの行動を制止する。

「けっ、相変わらず醒めてやがるな」

「落ち着け。その負け犬、貴様の素性は調査済みだ。大人しく国際司法裁判所へ出頭でもするんだな」

アルベルトの顔色が変わった。

「君は何を掴んでいるのだ？」

「『ノア計画』……」

ノア計画とは『クイーン』という超高性能電子頭脳が考案した世界掌握計画のことを指す。世界各地を占拠し、命令に従わなければそこを爆破すると宣告し、世界を人質にしようとしたのだ。

「何？」

「これだけいえば分かるだろう。あれに貴様も関与していた。地中に埋められた爆弾の調査をしていた俺には分かった。爆弾の材料が何であるか……」

低い声で紫電は言の葉を紡ぐ。

「貴様は秘密裏に『クイーン』に協力していた。あの『爆弾』の材料は」

「人間だ」

アルベルトは紫電を遮った。くくく、と腹をよじって笑う。

「そうだ、人間だ。生きた人間だ。画期的な発明だろう。素晴らしい発想だろう！」

「甲高い笑い声を上げた。」

「狂ってやがる……」

ジョーカーは顔をしかめて吐き捨てる。

「せっかく、ジユチⅡハルディアもいることだし、少し解説してやるつか。あれらは『第零機関』製作の過程で生まれた副産物なのだ。身体能力の飛躍的向上。だが、その刃が我々使用者に向けられぬような装置が欲しかった。歯止めとなるのはやはり命だろう。そこで

考えたのが人間爆弾なのだ」

にやにやとしたいやらしい笑みは崩さない。

「素晴らしいぞッ！ かつての、旧日本軍の特攻隊のようにな。わずかの犠牲で大きな戦果をあげることが出来る。そして私は何一つ損をしない。本当に素晴らしいッ！」

「デメエ！ ぶっ殺してやる！！」

シヨットガンを振り回すジョーカーを再び紫電が制した。

「何度も言わせるな。こんなクズ野郎はいつでも殺せる」

「しかし」

「黙れ。おい、負け犬。続きを聞かせてもらおうか」

有無を言わせない。

「負け犬、か。私はまだ負けてはいないのだがね」

「そんなことはどうでもいい。貴様はいずれ死ぬのだからな。俺に殺されるか、ヤツに殺されるか。どちらかだ」

そんな時に怪しげな全身タイト姿の五人組が登場した。

「ボクのお愛を見るがいいッ！ 友愛はボクのソクラテスでそbgあどbirdばーがb（理解不能）」

紫電とジョーカーはそれを一瞥すると、視線をまたアルベルトに戻す。

「ボクを見るッ！ ボクはこの物語の主演、鳩川紀夫なんだぞ。ボクのお愛があるからこそ、この物語は続くのだッ！」

「死ね」

「うぜえよアンタ」

「誰だね、このルーピー（狂った馬鹿）は？」

「貴様のパトロンだろ」

「ああ、そんなヤツもいたな。つまらない人間だった」

五人のタイト姿は一列に並ぶ。

「自己紹介をしてやるぞ。ボクのお愛がみ・な・ぎ・るッ！ 友愛レツド、座右の銘は『愛は世界お花畑計画』！」

続いて青色のタイトがポーズをとる。

「国家転覆ッ！ 国内政治破滅担当！ 原田ブルー！ 私の頭はツラじゃないぞ！」

次は黒。

「朝鮮大好き小川一郎・ザ・ブラック！ 真の愛は売国にありッ！」
次はピンク。

「第九条は神の声なんですう！ 国防なんて知りません、みずぼザ・ピンク！ 愛の力で国を滅ぼしますう！」

最後はグリーン。

「子ども手当てで愛を実現！ ジャパニーズ迫害&大増税決行ッ！

吾妻経済財政破滅担当・ザ・グリーン！」

自己紹介が終わったらしい。全員が集まる。

「「みんな揃って！ 聖拳甲隊ッ！ ジミンガー！」」

びしつと全員が思い思いのポーズを決めた。

「あー、何だね。この不細工で変態で救い様のない集団は？」

アルベルトは頭を抱える。

「俺に聞くな。警察か医者を呼べ」

「もう既に手遅れと思うけどな」

五人のタイツはポーズを崩した。

「ふははッ！ ボクの愛が世界を変えるのだッ！」

「生まれてくる時代間違ったよな、アンタ」

ジョーカーは必死に笑いを堪えている。

「何でもいいが、話の続きがしたい。と思ったのだが……」

アルベルトは左手を上げた。

見た目二十代半ばの青年が音を立てずに現れる。

「強風、あのルーピーを始末したまえ」

『強風』と呼ばれた青年は腰に付けられた小太刀を抜く。

無言で、表情を変えずに鳩川に襲い掛かった。灰色の短髪が揺れる。

「ひいひい！ 愛が、愛が。ママ~~~~~!!!!!!」

紫電はその小太刀を横から切り払う。

「やめておけ。こんなキチガイを殺したところで意味は無いぞ、強風」

「紫電……」

強風は視線を紫電に向ける。西欧人のようにくつきりした顔で、鷲のくちばしのような鼻を持つ。左目には眼帯をつけている。右目は蒼い。

「無口なのは相変わらずか。烈風に、兄貴に似ているな。そして……」

紫電は一瞬目を閉じた。

「俺の記憶はあるようだな」

「ああ……俺は……蘇った……わけじゃ……ないから……な」

言葉は抑揚が無い。表情も変わらない。

眠たげな目はアルベルトに向いた。

「強風、もうよい」

アルベルトは冷たく言った。

「退くぞ」

強風は煙幕弾をばらまいて、数秒と経たないうちにその場から消えうせる。

「強風ごときはいつでも潰せる。問題は……」

「俺の仕事から片付けるか」

紫電とジョーカーは鳩川を捕まえて日本政府に突き出すことにした。

第十話：人間爆弾（後書き）

こんばんは、Jokerです。
すみません、壊れてます。

鳩川じゃなくて私自身が（笑）

まさかこんな文章書く日がくるとは……

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

番外編：幸せになるために？

少年は老人に尋ねた。

「僕はこの力を持って生まれしてきた。けど、僕は幸せじゃない」

老人は柔らかな物腰で憂鬱な顔をしている少年に答える。

「そうかな。君は何でも出来る。将来の希望そのものではないのかな」

少年は老人の言葉どおり何でも出来た。わずか十歳の時に遺伝学で有名な大学に入学し、十二歳で博士号を取るに至った。文字通り天才である。

「誰も僕のいう事を理解してくれないんだ。誰も僕に利益以外の目的で近づこうとしないんだ」

「そうか。確かにそれは寂しいことだね。でも」

老人は少年を見つめる。

「君は間違いなく、両親に愛されているよ。そして私だって君の話聞くくらいはできる」

「でも」

「今見えている、君の行く道はランプのない船で真夜中の海をたった一人で渡るような、寂しい道かもしれない。でも君は両親に愛されて生まれてきた。君はいつだって一人じゃない」

「そんなの詭弁に過ぎないよ。僕は辛いんだ」

「君は何が欲しい？」

「僕は『普通さ』が欲しい。僕は普通の人間に生まれたかった。普通に学校に通い、普通に友達を作り、普通の仕事に就く。そんな人生が欲しい」

少年の目には涙が浮かんでいる。

「どうして僕は普通じゃないの？ どうして僕はこんな頭をしているの？ どうして僕はずっと一人なの？」

問は止まらない。

しかし、その間に老人は答えることが出来ない。誰も答えることは出来ない。

「お爺さんも僕に答えを与えてはくれないんだね」

「答えは自分で見つけ出すものだ。君の人生は君が切り開くもの。誰も助けられない。君を救えるのは君だけだ。すまない、私では君の求める答えは出せないんだ」

「……」

少年は一度俯いて立ち去った。

「あの子に祝福があらんことを……」

老人は少年の背を見送ると、ステンドグラスの前に立つ聖母像に祈りを捧げた。

番外編：幸せになるために？（後書き）

こんにちは、Jokerです。

哲学的な話題になってしまいました。

というのも私が研究しているテーマだからです。

どうすれば人は幸せになれるのか。

ところで、この少年とは一体誰でしょうか？

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

番外編：幸せになるために？

「『クイーン』、君はどう思うね？」

アルベルトは暗い部屋で『クイーン』と呼ばれる超高性能ロボットに語りかけた。

ロボットとはいっても、人間の脳みその形をしたグロテスクな物体である。大人の頭よりも一回り大きなフラスコの中で、緑の液体に満たされ培養されている。

「難シイ問デスネ」

その声は機械によつて作り出された合成音。

「真理を得ることは人を幸せにするか？ 真理を得ずにもがき苦しむ私は果たして真理を得ることによつて幸せになれるか？」

「サア……。タダ……」

「ただ？」

「真理ヲ得ルトイウコトハ、真理ヲ探スコトガ出来ナクナルコトヲ意味シマス」

アルベルトは逡巡した後

「それはきつと不幸なことだろうな。私は真理という幸せの境地を得るために真理を求めているのだが、それを手にしたとたん不幸になるとは」

と小声で返事した。

「矛盾デスネ」

「ああ、そうだな。自分でも可笑しいと思うよ。幸せを掴んだはずが、手に入れたものは不幸なんだから」

「幸セデアルコトノ必要充分条件ハ不幸デアルコトナノカモシレマセンネ」

「私は今不幸だろうか？」

「サア？」

「それとも私は自分の幸せに気付かないだけなんだろうか。あるいは

は幸せになることは不幸を手に入れることを意味するのだろうか」

「サア？」

「この年でも分からないよ。『彼』ならばわかるのかもしれないがね」

「『彼』こそ不幸ナ人デシヨウ」

「そうかもしれない。その優れた頭脳にあらゆる英知を得た。だからこそ、『彼』は不幸なのかもしれない」

「マルデ……」

「誰もいない暗闇の中で『彼』は一人佇んでいるのだろうか」

「アナタハ、ソレトハ別ノ暗闇デ一人デイルノデハ？」

「ああ。そうかもしれない。誰も私を理解できないし、結局私は一人だろうね。……私は本当に不幸だろうか、それとも幸せだろうか」

「一人デモデスカ？」

「一人でも。それを私が望むなら。ただ時折思うんだよ。『普通』に生まれたかった、と」

「ソウデスカ」

「『普通』であることのありがたみが分かるよ。例えば、病気になったとき、いかに健康が有難いか分かるだろう？ あれと一緒だよ」

私はやはり幸福であり、不幸であるんだな」

「ソウデスカ」

「『普通』に生まれて、『普通』に成長し、『普通』に大人になればこんな道は歩まなかっただろうからね。ああ、でも……そうでなければこんな刺激的な人生はなかったわけか。どっちが良かったのだろうな？ ただ、隣の花は青いというのか、やはり『普通』であるありがたみは私が一番わかるよ」

番外編：幸せになるために？（後書き）

こんばんは、Jokerです。

またもや番外編です。

再び哲学的な話です。

幸せって、つまるところ一体何なんでしょうね？

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

第十一話：亡国への道

「ぼぼぼ、ボクの愛は無限なんだッ！ 友愛なんだぞッ！ 必ずしもボクの思いは公約じゃないんだッ！ 愛は憲法すらも越えるんだ！」

「黙れ、このルーピー！ 今から貴様を日本に送って処刑してやるから覚悟しておけ」

紫電は『聖拳甲隊』の四人を躊躇なく斬り刻んだ後、鳩川を捕まえて縛り上げた。

「紫電、それは俺の仕事」

「何だ、貴様」

「ジョーカーだ」

ジョーカーはため息ひとつついた後

「とりあえず、俺が空港までこのキチガイを送るわ」と投げかける。

「ふん。こんな変態相手に仕事とは貴様もついてないな」

「お互い様だ」

少し笑った後、紫電とジョーカーは別れた。

「俺はアイツに追いつけるのかな」

それは相手には聞こえていない。

ジョーカーはまずドレスデンのギルドへ行き、手続きを済ませる。ギルドから新しく日本への護送依頼を受けて、空港へと向かった。

アルベルトは強風と共に日本へ向かっていた。

大阪府に潜伏し、準備していた研究所へもぐりこむ。

「やれやれ。剣部隊があそこまでもろいとはね」

コーヒーを淹れる。

灰色のコンクリートで四方を固めた無機質な部屋で一人佇んでいた。

「第零機関はまだ発展途上、ということか。理論上は彼のようにな

れるはずだからねえ。ところで、強風。あの男はもうカプセルに入れたかね？」

「はい」

強風は音を立てずにアルベルトの前に現れる。

「確か、ロンメル総長……でしたね。よろしいのですか？ ……昔の仲間だった、と聞きましたか」

喋りにくそうに強風は会話を続ける。

「いいのだよ。あんな国粋主義者に出てきてもらっては困るのだ。あれはあれで扱いにくい。そうだな、第零機関の実験台にくらいにはなるだろう。例の物質を彼の体内にいれて実験するのでしょうか。どれほど自我を保っていられるのか楽しみだよ」

めがねをいじりながらアルベルトは笑って答えた。

鳩川を日本政府に引き渡すと、ジョーカーは五千万ドルの報酬を東京都法務省で受け取った。

「えええ！？ こんな友愛キチガイにこんな賞金かけられてたの？」
官僚に尋ねる。

「はい。彼は日本滅亡の主犯及び邪教である友愛教の教組ですから。日本以外にもアメリカやイギリスが指名手配していましたし」

「世も末だねえ。これを選んだ日本人が多かったってんだから」

大量の賞金を手にジョーカーはほくほく顔で日本を後にした。

鳩川が逮捕、日本政府による裁判が始まってから二ヶ月が経った。世界は一時的に平和を取り戻した。『クイーン』のもたらした混乱は全世界で収束し、人類は大きな傷跡を歴史に刻みながらも再び歩き始める。日本では日狂組によるミンス党が圧倒的な支持のもとに政権を握り、鳩川を秘密裏に釈放させる計画を進めていた。日狂組とは朝鮮連王国出身のキムジョルソンが組織した労働組合の一種である。目的は日本教育の友愛化とされ、第二次世界大戦での日本の植民地支配に対する謝罪を未来永劫行い、日本が朝鮮連王国の属国になるべしと唱える集団だった。誰も日狂組の行動に気付かず、内側から徐々に崩壊していくのを見向きもしない。

表向きの平和は続いた。

しかし、それも長くは続かなかった。

アルベルトが突如として東京都を襲い、日本政府を掌握したのである。

アルベルトの後ろには一世紀近く前に死んだはずの人間、遙か昔の英雄などがぞろぞろといた。

「第零機関は完成した。これで完全なる新生人類による新しい歴史が始まる。今の劣った現生人類は世界にはいらぬ。『彼』のような、進化した人間が今再び地球を統べるときが来たのだ。手始めとして、愚民の多い日本から占領し殺戮してやるうではないか」

アルベルトは日本人全員の抹殺を宣言した。

「鳩川たちを首相に担ぎ出した愚かな民族など滅んでしまえばいい。考えることをやめた人間などクズほどの価値もない！」

日本を中心とした戦争が再び始まるうとしていることに気付くものはほとんどいない。

第十一話：亡国への道（後書き）

こんばんは、Jokerです。

参院選がもうすぐですね。

日本が亡国となるか否か。

無知は罪という言葉がありますが、今においてはその通りだと思います。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

「今、世界は泣いている。そして人類は生まれ変わるべき時に生きているのだ」

零と俺以外の観客はいない。

アルベルトとかいう変な野郎は自己陶醉している。

「興味はないかね？ 究極の理性、思考力。そして戦闘能力」
何が言いたいんだ？

「我らの祖先である新人、クロマニヨン人が旧人どもを滅ぼしたのは優れた知性と戦闘能力があったからだ。人間を進化させうる能力はこの二つ。つまり、この二つを進化させれば人類は新たな境地に至ることが出来る」

くだらない内容だ。

そんなロボットみたいな人間を作りたいのか。

考えている暇はない。

まだここに戦火が及ぶ可能性は充分ある。

俺と零は狂った男を放って、大臣を街の外まで運び出すことにした。

戦闘機は俺と零がかなりの数を倒したので、減ってはいた。

それでも機関銃やミサイルを遠慮なく、大地に振り撒いていく。

「少年、先に行け。ここは俺が食い止める」

戦闘機が二機、逃げる俺たちの目の前に現れた。

零は『羅刹』を抜く。刀身が緑色に輝いた。

柄についた引き金を引くと、淡い緑色の光が刀身から発射される。

それは獲物を貫通し、巨大な爆発が起こった。

「どうした？ 逃げろと言っただはずだぞ」

「アンタを置いて逃げられない。アンタも一緒に生き延びるんだ」

「甘いヤツだな。俺はお前の敵なのに」

零は苦笑すると再び俺たちと街の外を目指した。

無事に退避を終えると、俺は街の中心部から数キロ離れたところにあつた木造の空き家に大臣を運んだ。

家の周りは森に囲まれている。そのせいか、薄暗い。

兵士たちに手当てをさせて、俺は家の薄汚れた外壁にもたれかかる。空はもう暗くなっていた。

星が冷たく光っている。

「やあ、ジユチ」

零は穏やかな口調で話しかけてきた。

「何だ」

「お前はこれからどうするんだ？」

「言うまでもないだろ」

「そうだな。お前は護衛には勿体無い。そんな気がするよ」

「殺し屋にでもなれ、というのか」

「いいや。お前の行き先にあれこれ言う気はない。ただ」

空を見上げる。優しい瞳。暖かい。

「『考える』人間になってほしいと思うんだ」

「考えてるよ」

「そうじゃなくて、例えば自分の生き方。お前にだって意志はあるだろう。目標はあるだろう。それを叶えて生きてほしいと思うんだ」

「……」

「試練は乗り越えられない人に襲い掛かりはしない。そして、出来るとか出来ないじゃなく、可能性じゃなく決断できる人間になってほしいんだ。これは俺の弟子にも言っていることなんだが」

こいつの弟子か。幸せ、なんだろうな。

「今、『クイーン』に支配されているのも多分俺たち人間が『考える』ことを放棄したからだと思う。俺たちの祖国である日本が北京民主共和国や朝鮮連王国の支配下に入ったのも。だから、己自身が後悔しないために多くのものを見て、多くの何かを感じて、生きてほしい」

「年寄りの繰言みたいだな」

「違うない」

笑った。

やっぱりコイツは暗殺者なんかに向かない。

「じゃあな。明日、改めて任務を果たさせてもらおう。覚悟しておけ」

その台詞を発すると同時に街へと戻っていった。

明日になった。

大臣は昨日のショックから起き上がれない。

「大臣、この家は俺が警備します。ご安心を」

その日、俺の人生は大きく変わることになる。

そのことを当時の俺は全く知らなかった。

そして、これが紫電との接点になるのだとも知らなかった。

こんばんは、Jokerです。

ここには載せていませんが、応募用に書いている小説があります。

描き方に四苦八苦しながらですが。

納得できる出来に仕上がったらこちらにもあげようと思います。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

翌日、零は予告どおりに小屋で眠っている大臣を狙ってきた。そしてその前に俺は立ちはだかる。

「アンタ、暗殺者には向かないな」

「そうかな」

柔和な表情が一転して険しいものになる。

いや、険しいんじゃない。あれは覚悟を決めたんだ。

人を殺すということは殺されるということも想定している。

やはりあいつは一流の暗殺者なんだろうか。

昼の太陽は燦々と大地を焦がす。

俺はシヨットガンを構えた。

「零も同じく得物を構える。」

「遠慮なしだからな」

「無論」

俺は出来れば、この殺し合いはしたくなかった。

「いくぞ！」

二つの声が重なる。

俺は相手の動きを封じるために散弾をばら撒く。

しかし零はそれを切り払いながら俺に向かって前進してくる。

「甘いぞ、少年」

横なぎの一閃を銃身で受け止める。

多分手加減したな。

「これはお情けだな」

そう言っつて数メートル跳び下がった。

「上等だ、来いよ」

挑発する。もちろん零はそんなのには乗らないだろう。

「煽ってるつもりか、少年。俺はそんなに……」

木々の陰で何かが蠢く。何か黒いものが陽光を受けて輝く。

零はそれを見ると目を見開いて、姿を消した。

俺はその時何が起こったのか分からなかった。でも、一発の轟音が響いた後に何が起こったのかを理解した。

何故なら体を真つ赤に染めた敵が俺の目の前で仁王立ちになっていたのだから。

彼は腹のど真ん中に風穴を開けていた。

その弾丸は彼に当たらなければ寸分変わらず俺の心臓を貫いていただろう。

彼は大量の血を吐く。

「あれを……撃て」

荒い呼吸で零は俺に告げた。木の陰に隠れている影を指差す。そして、どさりと力なく地面に崩れ落ちる。

「ちくしょうッ！」

俺はショットガンを構えると背を向けて逃げる間抜けな人影に向かって、ありつたけの弾丸を乱射する。怒りに任せて引き金を引く。いつも人を撃つ時にはわずかな躊躇があったのに、この時はそれが一切ない。怒号と共に何十発も弾丸をばらまき、人影が肉片に変わるまで撃ち続けた。

「おい大丈夫か？」

俺は人影が倒れたのを確認すると、零に走り寄った。そして、膝をつく。

太陽は燦々と大地を照らしている。じりじりとした高温が肌を焦がす。

「……無事か、ジュチ」

「喋るな。アンタ、馬鹿だよ！」

俺の瞳からは何故か大粒の涙がこぼれ始めていた。もう、何年も泣いたことなんかなかったのに。誰かのために泣いたことなんかなかったのに。

「はは、弟子にも……紫電にも言われそうだ」

零の腹にある穴から内臓が見える。それは弱々しく鼓動していた。

もう助からないだろう、この傷では。

「……何か、言い残すことはあるか？ 俺に出来ることなら何でもしてやる」

「……忍がそんなこと言うと、でも？」

「ぜえぜえと息をしながら零は笑みを崩さずに答えている。

「言えよ。そうでもしないと……」

泣いている俺の頭をぼんぼんと優しく叩いた。どうして、そんなに俺のために笑える？ 俺はアンタの敵だったのに。

「俺はお前のような少年が、先に死ぬのを見るのが……」
吐血する。

「い、嫌なんだ……」

「俺はアンタに先に逝かれるのが嫌だよ！ ちくしょう！」
体が震える。

怖い、わけじゃない。悲しい。苦しい。辛い。

「はは、お前こそ……優しすぎ、る」
顔から血の気が引いていく。顔には死相が現れ始めた。

「喋るんじゃない」

分かってる。もう、手遅れなんだって。

「俺はもう駄目だよ」

荒い呼吸を続けながら零は俺に言った。

「その、銃……を、引き金……を引く時は考える。何のために、引くのか……何故……銃を、使うの、か……」

一瞬、ふつと笑うと呼吸をやめた。

死ぬってこういうことなんだって初めて近くで感じた。

怖い。辛い。悲しい。

そんな単純な気持ちじゃない。それらが混ざり合った複雑な気持ち
が胸の中から湧き上がってくる。

俺なんかが生きてていいのか？ 俺も人殺しには変わりない。俺
のせいで、今日も誰かが悲しみ、涙を流しているだろう。

俺は一体何なんだ？

無意識のうち、俺はその場から逃げた。もうここにはいたくない。

森の中で一人で泣くと、少し気持ちがおさまった。でも、解決したわけじゃない。

「戻ろうか」

重い足を引きずって、大臣のいる空き家へ向かう。この時、俺はあることを決断していた。

番外編：Another Story of Joker? 〈少年期の終わり〉

こんばんは、Jokerです。

更新頻度が遅れてしまい、すみません。

あと一話でジョーカーの過去話も終わります。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

「アンコール大臣、本日をもって俺は用心棒を辞めさせていただきます」

政府内に設けられた大臣室で俺はアンコール大臣に辞表を出した。ウィーゲルから帰還して三日目のことだ。

「どこへ、行くのだ？」

「どこかへ。ここではない、どこかへ」

俺はそれだけ告げると、大臣に一礼して退室した。

俺は怖かった。

自分も、人も、何もかも。

全てから逃げ出したかった。

そして逃げ出した。

もし、俺が普通の人間なら、零を殺したヤツをあんなにむごい殺し方で殺せただろうか。

もし、俺が普通の人間なら、人間に怯えながら生き続けるのだろうか。

俺は恐ろしかった。

怒りに任せて人間を惨殺することの出来る両手も、それを戸惑わずに行える自分自身も。俺は俺を含むすべての人間が怖くなった。

そんなことを考えていると苦しくなった。

零に話したくなった。あいつなら、俺の問いに答えてくれるかもしれない。俺に答えを与えてくれるかもしれない。

でも、その考えはすぐに頭の中で否定された。

あいつならきつとこう言うだろう。

「自分で考えるんだな」と。

そんなことをつらつらと悩みながら、俺は政府を後にした。

どこへ行くだろう。

行きたい場所はあった。

それは日本。^{ジャパン} あいつが生まれ育った国だ。どんな国なんだろう？
どんなところなんだろう？ 興味は尽きない。もしかしたら、俺
の人生が動くかもしれない。俺は前に進めるかもしれない。

そして、数日後。俺は日本へ渡った。

しかし、噂に聞いていた東洋随一の経済大国は見る影もなく衰退
していた。

『愛こそが正義！ ミンスの愛を世界へ。友愛への信奉と北京民主
共和国への絶対服従を！ それが国民の義務である』

国は壊れかかっている。それが分かるまで時間はかからなかった。
一部の政治家がメディアを牛耳り、企業経済は落ちぶれている。
商店街はシャッターで閉鎖されており、街には人がいない。何故か
日本の街を歩いているのは朝鮮連王国と北京民主共和国の人間が多
い。

ああ、ここも狂い出しているんだな。ウィーゲルの地と同じよう
にここも。何か近い将来起こるんだろう。血を流すことにもなる
はずだ。

そんな時、あいつの言葉が脳裏に蘇った。

『考えるんだ。ジユチ、君が何をしたいか』

考えていた。ずっと考えていた。間違ってしまうかもしれない。
もう既に間違いなのかもしれない。でも、それでも出した答えに頷
いて、俺はここに来た。

「俺は、あの地で起こったことを二度と繰り返させないためにいる」
あの日と同じ出来事が起こるのであれば、それを止めるのが俺の
仕事だと思う。

弱い者が陵辱され、奪われ、殺される光景は見たくない。

そして、俺はそのために日本を外国人勢力と結託して支配してい
る鳩川紀夫らの護衛として、乗り込んだ。そこで、初めて俺は紫電
という男と出会うことになる。

彼がああ零の弟子ということが分かるのはもう少し先の話だ。

これが俺の昔話。

え？ 大分強くなった？ そんなことはないよ。俺は俺。昔の『泣き虫ジユチ』のままだ。

今でも人間は怖いし、武器も怖い。何より、俺は俺が怖い。でも、少しずつ強くなると思う。それに弱いことは悪いことじゃない。

そしていつか、この荒んだ世界を変えたい。誰でもいい誰かを守りたい。

俺は零じゃないし、零の代わりにもなれない。あいつみたいに強くないし、頭が回るわけでもない。それでも、俺はあいつがくれた命でこの世界を生きる。譲れない願いのために。

これだけは弱くてもずっとずっと変わらない。

最後に。零という人間に出会えたことを感謝する。

ジユチ「ハルディア

番外編：Another Story of Joker? どこかにいる誰

こんばんは、Jokerです。

これで番外編Another Story of Jokerはお
終いです。

ジョーカーの裏設定をもれなく暴露しましたが、お楽しみいただけ
たでしょうか？

次回からは本編を進めます。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

第十二話：終わりの始まり

次に標的とされたのは日本第二の都市である大阪だった。巨大な爆撃機を駆り、アルベルトは侵攻を進める。

「日本政府には宣戦布告してきたかね、スターリン君？」

敵つい口ひげを生やした、かつての独裁者は無言で頷いた。

アルベルトは爆撃機のコクピットで下の世界を見ている。

機体からは絶え間なく爆弾が投下され、街は既に焼け野が原になっ
ていく。

「さてと、そろそろ朝鮮連王国から宣戦布告が来る頃なんだが……」
アルベルトは腕に付けた純銀製の時計を見る。鼓膜を壊すほどの
爆音が鳴り響いているが、涼しい顔をしていた。

「強風、朝鮮連王国への進撃は君に任せよう。新しく開発した『雷
電』も連れて行くがいい」

おもむろに電話を取り出し、強風に連絡を取る。その顔は余裕で
満たされており、他者を見下したような嫌らしい笑みが浮かぶ。

「さて……無知なる者、滅ぶべし」

アルベルトは腹をよじって笑い出した。しばらく、狂ったように
奇声を発した後、地図を取り出して、熱心に眺め始めた。

ジョーカーが日本政府の高官からの依頼を受けたのは大阪府が空
爆されてから一日経った頃だった。突如、電子メールを受信した。

『謎の集団によるテロが発生した。原因を突き止めた後、速やかに
彼らを排除せよ』

これが今度の任務だ。

ハワイでくつろいでいたジョーカーは苦虫を噛み潰したような顔
で日本へ向かう。

「いつから日本はテロリストが跋扈する国になっちまったんだ？
ろくに美人のお姉ちゃんたちとエンジョイできやしねえ」

ぶつぶつと不平不満を垂らしながらハワイ空港へと向かっていく。

その頃、紫電も日本へと足を進めていた。

こちらは無言で、ただいつもと同じ冷たい光を宿した瞳をして。アルベルトはその間にも大阪を蹂躪している。

破壊者たちが大地に降り立つと、大阪府庁の長となっていた赤山がアルベルトに近づいてきた。この男はアカヒ新聞社社長として日本を滅亡に導いた人物である。

『愛は宇宙を救う。愛の名の下に鳩川紀夫を支持し、愛の道に歩まん』

として日本を北京民主共和国に売ることを正当化したことは記憶に新しい。

彼はうやうやしくアルベルトに礼をした。

その後、怯えた声でべらべらと話し始める。

「これはこれはアルベルト様。私、アカヒ新聞社前社長の赤山と申します。この度はご苦勞様でございました。私どもは愛の救世主を求めておりまして、アルベルト様こそが友愛の神であると存じ上げて……」

アルベルトはそれを一瞥すると拳銃で躊躇なく額を撃ちぬいた。

「ふん。売国奴ごときが助命嘆願とは片腹いたいわ。殺せ、愚民は生きる価値すらんし」

第零機関を搭載した『新しい』人間による人間の虐殺はさらに激化していった。

『新しい』人間たちは笑いながら、人間を殺した。

首を搔つ切り、四肢をへし折り、頭を粉々に砕く。ありとあらゆる残虐な方法で、しかも効率的に人間を殺していく。

泣き叫んでも、命乞いしても眉一つ動かさずに屠る。

たとえそれが女子どもであろうと平等に殺戮は行われていった。数時間もすると殺人劇は終わっていた。つまり、それは大阪府の人間が全て殺されてしまったことを意味する。日本の全人口が殺され尽くすまで、多くの時間は残されていなかった。

それから一日後、ジヨーカーは大阪府へ入った。

血まみれの大地には紅く染められた物言わぬ人間が転がっている。首のない死体や、原型を留めていない死体が数え切れないほどある。

「……なんで、人間はこうも愚かなんだろうな」

乾いた大地を踏みしめて、立ち止まる。空を見上げた。殺し合いの終わらない世界を見つめた。

空は青い。

大地で起こっていることなど知らないかのような、いつでもどこにでもある空がそこに広がっていた。

「行かないとな。これも終わらせなければ。何度でも、こんな事件が起きるのなら、何度でも終わらせてやる！」

燃えるような赤い髪をなびかせて、歩き出した。

時を同じくして紫電も大阪府へと入った。

第零機関を搭載した新生人類を表情一つ変えず斬りながら、突き進む。

血塗られた大地を歩きながら紫電は大粒の涙を流した。

「また、この地で事件を起こしてしまった……」

その言葉からは慙愧の念が伺える。立ち止まって、項垂れた。

「俺はまた、大事な故郷ものを守れなかった」

紫電の背後で、人影が蠢く。その影は隙をついて、紫電に飛びかかった。紫電は見向きもせず、一刀のもとに斬り捨てる。

「悔やんでなど、いられない。ガレスや雷電に顔向けできない」

ガレスは『クイーン』事件で紫電と共に戦い、命を落としたアメリカ人である。彼の最期は紫電の胸に大きな傷として残っている。

鮮血を浴びて、紫電は刀を背中に納めた。

「始まったなら、終わらせてやるまでだ」

紫電は大阪府内を探索し始めた。

第十二話：終わりの始まり（後書き）

こんばんは、Jokerです。

蒸し暑い日が続きますね。夏が一番苦手です。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

第十三話：死界

紫電は血まみれの街を這いずるように歩いた。

鋭かった瞳はやがて生気を失っていき、足どりは重くなっていく。

「誰か、いないのか」

誰もいない。生きている人間は大地にはいない。

風が空気を切り裂く音だけが響く。美しかった海は灰色に染まり、別世界のようになっていた。

太陽はぎらぎらと荒れ果てた大地を照らす。

紫電の顔からは汗が流れ落ちる。ぼたぼたと大粒の水滴を垂らしながら、大阪府から京都府まで歩き続けた。その間も灼熱の太陽は紫電の体力を奪い続ける。

京都府に入ると、京都駅の前で一人の男が倒れているのを発見した。ぼろぼろの軍服を纏っている。

紫電はその男に向かって歩を進める。

「生きているか？」

返事はない。ただ、鼓動は聞こえた。どくん、どくと力強い脈動がする。

「仕方ない。これでは日干しになるな」

紫電は男を抱えて駅ビルに入った。

駅ビルはアルベルトたちの空爆の被害を受け、外装がぼろぼろとなっていたが、内部は比較的損害を被っていないかった。

紫電は男を地下一階にあったベッドに寝かせる。

「やれやれ。こいつだけが生き残り、というわけか」

手近にあった椅子を引き寄せて、身体をそこに放り出した。

二時間ほど経つと、男は目を覚ました。

黒の短髪を揺らして起き上がる。

紫電が想像していた言葉と全く異なるセリフを彼は口にした。

「実験は……成功したのか」

何の実験のことか、紫電には分からない。

「貴様、実験というのは何だ？」

男は精悍な顔を暗殺者に向けた。

細い目の奥には強い意志を宿した光が見える。アジア人にしては高い鼻も特徴的だ。

「ああ、これは失礼。あなたが助けてくださいだったのでですね？ 申し訳ありませんが、答えるわけにはいきません」

見た目は三十代のようだ。口ひげと頬ひげが濃いせいで、老けて見える。

「答えられない、だと」

紫電の鋭い眼光にもひるまない。

「はい。軍人として答えるわけにはいきません」

穏やかな口調の中には確固たる意志が見え隠れする。

「察しはつく。『第零機関』だろう？」

男は一瞬だけ目を見開いて

「よくご存知ですね。その通りです。私は第零機関を埋め込まれた実験体です」

と答えた。

「ジャパニーズが実験体になっているのか」

「私が日本人だとよく分かりましたね」

「同郷なら分かる」

「なるほど」

男は苦笑すると、ベッドから立ち上がる。

「私は室賀軍平と申します。陸軍少尉です」

「紫電だ」

いつもどおりに愛想のない挨拶をする。

室賀はそんなことを気にせず微笑んでみせた。

「ところで、貴様を実験体にしたのは誰だ？ アルベルトとかいうヤツか？」

灰色の壁紙は所々破れている。

「いや、思い出せないのです。誰が私を実験体にしたのか」

「どこから記憶がないんだ？」

「大阪府のとある施設でカプセルに入れられていたところからです。そこから数日前に脱出して、ここで倒れたのです」

紫電は顔をしかめて考えた。

今の日本には陸軍なるものがない。第二次世界大戦後に解体されたからだ。

その陸軍を名乗っているのが二つ目の疑問である。

二つ目の疑問は記憶がないということだ。アルベルトの仕業ではないとすると、アルベルトの他に第零機関を扱っている人間がいるということになる。

二つの疑問が浮かび上がったとき、紫電は事態が想像以上に複雑化していることに気付いた。

「どうかされましたか？」

紫電は室賀の目を見た。瞳が黒ではなく、灰色である。

「いや、何でもない。それより、俺に協力してくれないか？」

「何をすれば？」

「とりあえずは侵略者どもを日本から叩き出す。次に第零機関に関する情報を得る」

室賀は痩せた身体に力を入れた。

紫電はまだ警戒を解いていない。この男がアルベルトの差し金である可能性もあると思っっているからだ。

疲れた身体を引きずって、二人は西へと脚を向けた。

第十三話：死界（後書き）

こんばんは、Jokerです。

今日は参院選でしたね。投票に行きました。
結果はどうなるか。日本が心配です。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

第十四話：西へと吹く風

紫電と室賀は広島県に入った。

広島市内は大阪府と同じように破壊されつくしている。広島市のシンボルでもある原爆ドームは一部崩れ、高層ビルは外装がどろどろに溶かされていた。おそらくは爆撃によるものだろう。

「ここは久しぶりだろう？」

紫電は室賀に歩きながら問うた。言葉に力がない。その脚も幾分か筋肉を失い、痩せてきている。

「はい。かつての……大戦以来です。ところで、あの建物は何ですか？」

原爆ドームを指差した。

これを知らない者はそういない。しかし、このことが大きな手ばかりになった。

紫電は息を飲み込む。

（間違いない。この男は戦時中の人間だ。しかし、何故今の今まで生き延びたのだ？）

それに第零機関が関わっていることは火を見るよりも明らかだ。

集めた情報には第零機関は人体の能力を限界まで引き出すことが出来るというものがある。おそらく、この延命はこの影響だろう。

「ああ、あれは原爆ドーム。かつて原子爆弾が広島に投下されたときに、残った建物だ」

「そうですね……負けたのですね」

室賀は悟ったようだった。

「しかし、我が使命は終わっていません」

紫電は一旦思考を中断した。室賀に顔を向ける。

「何だ、その使命とかいうのは？」

「とある文書の回収と、真人マコトの抹殺、です」

重苦しい声が響く。

真人という言葉が紫電は初めて聞いた。

「で、文書というのは何だ？ ついでに真人についての情報も欲しい」

「いえ、これはお答え出来ません」

軍人らしいきつぱりとした言い方だ。

「貴様を守るべき軍務も上官もない。死人は生き返らんぞ」

「それでもいいのです。我が任務は上官より賜りしもの。それを遂行するまでは決して部外者にお教えすることは出来ない」

それきり会話は途絶える。

二人はずつと無言で歩き続けた。

ジョーカーは東京都へ入った。西日本は激闘の爪あとが残っていたが、関東以東はまだ戦火に晒されていない。

まず初めに政府へ向かい、依頼者の官僚から大まかな状況を聞く。どうやら西日本、特に福岡で戦闘が続いているらしい、とのことだった。アルベルトは政府及び首脳部を掌握をしているが、一般官僚までは拘束していない。一応、首脳にも意見を聞いておこうと総理大臣の執務室へ入る。もつとも、首脳部はアルベルトの手が入っているから、あまり参考になると考えてはいなかったが。

そこには鳩川紀夫がいた。

「おお、ジョーカーか。ボクの愛のために来てくれたんだな？ ボクの愛が金星を食べたんだな？」

二階にある総理大臣の部屋に鳩川がいるのを確認すると、げんなりした表情でジョーカーは口を開いた。

「いつそのこと地球から出て行ってくればよかったのに」

「はっはっは、ボクの愛がなくては地球はもたないだろう。友愛の伝道師として、ボクは地球に君臨するのだからなふははは！」

「テムエは一生不思議の国で生活してる」

豪快に一発散弾をぶっぱなして、部屋を出る。高価な花瓶や壁にかけてあるモナリザの贋作が粉々になったが、おかまいなしだ。

「ままま、待つてくれッ！ ボクは愛の特殊部隊を結成したんだ。」

見てくれ」

「冗談はその腐った脳みそだけにしてくれ」

もう一発ぶっぱなす。今度は天井に。

硝煙の臭いが漂った。

へなへなと腰を抜かす鳩川に背を向けて、ジョーカーは出て行った。行き先は、西日本。

去り際に

「そろそろ舞台から降りる頃合なんじゃないか？」

というセリフと一緒に小形爆弾を鳩川にプレゼントしていった。

ジョーカーが窓から飛び降りると、鳩川の部屋は景気のいい爆炎に包まれた。爆風で長く紅い髪が揺れる。焦げ臭い臭いが運ばれてくる。それは西へと向かう風によって、空に舞い上がった。

第十四話：西へと吹く風（後書き）

こんばんは、Jokerです。

練習用に作品を書き始めています。
なかなか上手くいきません（涙）

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6899/>

影追う者

2010年10月8日14時01分発行